ISSN 2185-8659

むなかた電子博物館 紀要

第 8 号

巻 頭 言〈平井 正則〉…… 1

特集：宗像のアサギマダラ〈監修：西田 迪雄〉…… 2
アサギマダラ観察記〈西田 迪雄〉……5
謎の蝶アサギマダラ〈前田 秀敏〉……21
アサギマダラの飼育観察ノート〈平松 秋子〉……42
アサギマダラの幼虫の食草　キジョランについて〈黒川 康子〉……50

論文：地元学でさぐる池野の魅力
コミュニティまちづくり計画での実践報告〈船津 建〉……62

コラム：「北斗の水くみ研究」コンパクトデジタルカメラを使っての星座撮影
〈平松秋子・堀内伸太郎・平井正則〉…… 102

むなかた日和：2016 年度 むなかた電子博物館新着情報に掲載された主な記事から
…… 108

編集後記〈宮川 幹平〉…… 115

2017 年 3 月 31 日
「むなかた電子博物館」紀要委員会

巻頭言

むなかた電子博物館紀要委員会

委員長　平井　正則

今夏は、福岡県・宗像市・福津市を中心として取り組んでいる"「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群"世界遺産登録の最終的な決定が行われます。いよいよという感じです。本誌としても、この登録は大変意義深いものと考えております。また、まさに昼夜の別なく関係事業に忙しい行政機関、関連団体には心から労い申し上げたく存じます。

今年度、紀要８号は、まず、宗像郷土にて観察される「アサギマダラ」に関する特集を組みました。このむなかた電子博物館委員のひとりでもある西田 迪雄氏をリーダーとして、この宗像にて精力的に活動を進める方々にお声がけを頂き、アサギマダラの特徴や飼育、その食草など、多様な観点からアサギマダラの魅力を明らかにして頂きました。また、さらに、福岡教育大学ドイツ語の先生でありました船津 建氏の宗像生活に根差した論文も大変興味深いものです。

本紀要は、むなかた電子博物館の取り組みやその記録だけに留まらず、それを支えている地域の文化や様々な活動など、思う限り、広い間口でのページ形成に配慮してきたつもりです。本号もその例外ではありません。ただ、編集スタッフの不足が創刊以来続き、そのため各年度の編集子には多大のご苦労をおかけしています。

むなかた電子博物館はもちろん、博物館を支える重要な柱のひとつであるこの紀要についても、今後ともよろしくお願いします。

梅が膨らみ、この冬の三寒四温が始まりそうな曇り空にて

特集
宗像のアサギマダラ

博多昆虫同好会　西田　迪雄

アサギマダラは初夏、南西諸島、台湾から日本本土へ渡り、世代交代した後、秋逆のコースを移動するので、渡りをする蝶として近年広く知られるようになり、集団飛来地の大分県姫島が時々新聞紙上で紹介されています。何故このような渡りをするのか？アサギマダラは寒さに弱いとともに暑さも苦手です。それゆえ、初夏暑さを避けるため日本本土へ移動し、秋寒さを避けるため南西諸島などへ渡ると説明されています。しかし、日本本土では関東以西で、幼虫の状態で越冬することも知られています。それならば、わざわざ秋季南西諸島へ移動せず、日本本土で幼虫越冬すればよいと思われます。一部は南西諸島へ渡り、一部は日本本土で幼虫越冬するのは何故だろうか？謎多き蝶です。

さて、アサギマダラは宗像市内で時と場所を選べば、出会えるのは易しいことです。5 月中旬～6 月上旬、さつき松原海岸、大島海岸、草崎西海岸などに自生する海浜植物のスナビキソウの白い花に多数が飛来する光景が見られます。また秋、大島ではヒヨドリバナに飛来する光景も見られます。さらに宗像の山々では周年、成虫あるいは幼虫の状態で見られるので、土着していると言っても間違いありません。

このような状況を踏まえて、宗像のアサギマダラ特集を企画し、3 名の方に執筆をお願いしました。それぞれ異なる角度から宗像のアサギマダラについて紹介して頂きます。宗像アサギマダラの会ではその幼虫の飼育とマーキングに取り組んでいるので、その詳細を 2 名の方に書いて頂きました。さらに、宗像植物友の会から幼虫の食餌植物キジョランについて寄稿して頂きました。筆者自身も宗像のアサギマダラについて拙文を書きました。この特集を通して、宗像市はアサギマダラの生息に適した環境であることを、広く知ってもらえれば幸いです。

宗像のアサギマダラ

アサギマダラ観察記 5
1. はじめに 5
2. アサギマダラの訪花植物 6
3. 宗像におけるアサギマダラ生息地 14
4. アサギマダラの謎　―その１― 17
5. アサギマダラの謎　―その 2― 17
6. マーキング 18
7. まとめ 19
謎の蝶アサギマダラ 21
1. アサギマダラはどんな蝶? 21
2. アサギマダラが好きな花 21
2-1. 蝶の移動と主な花 21
2-2. スナビキソウ 22
2-3. スナビキソウの分布 23
2-4. フジバカマ 23
2-5. ヒヨドリバナ 23
3. 何故移動するのか 24
3-1. 長距離移動実績－no.1 宮崎から宗像に飛来 25
3-2. 長距離移動実績－no.2 宗像から屋久島・奄美へ移動（南下） 26
3-3. 新標識に 28
4. 食草 28
5. 蝶の交尾 29
5-1. オスとメス・交尾痕 30
5-2. 求愛行動 31
6. アサギマダラの害敵 31
7. アサギマダラの成長 33
7-1. 卵から幼虫 33
7-2. 幼虫の大きさ 33
7-3. 前蛹から蛹 34
7-4. 羽化 35

8.　アサギマダラ風に乗る 35
8-1.　再捕獲の情報　（与那国島で再捕獲） 36
8-2.　移動情報　（再捕獲情報をもとに標識者が移動情報を出したもの） 37
8-3.　風にのる　（この移動を風の解析と気象図で判断） 38
8-4.　地図と気象図 38
8-5.　飛び立つきっかけ？ 39
8-6.　アサギマダラは風に乗る、まとめ 41

アサギマダラの飼育観察ノート 42
1.　はじめに 42
2.　飼育ステージ１ 42
3.　飼育ステージ２ 44
4.　飼育ステージ３ 46
5.　おわりに 49

アサギマダラの幼虫の食草 キジョランについて 50
1.　はじめに 50
2.　草姿 つる植物なのに立っている？ 50
3.　花 高嶺の花 53
4.　果実　袋果 54
5.　種髪を付けた種子 風に漂う 57
6.　有毒植物　　食痕の丸い穴 58
7.　終わりに 60

アサギマダラ観察記

博多昆虫同好会　西田　迪雄

1. はじめに

アサギマダラ、この名前を聞くたびに、筆者の心はときめく。レッドデータブックに登録されるような希少種ではなく普通種であるのに、何か魅了するものをもっている。翅の上品な浅葱色、緩やかに飛ぶ姿等々。

アサギマダラは秋、日本本土から南西諸島、台湾へ移動し、世代交代をした後、翌年初夏逆の移動をして日本本土へ渡ってくる。それゆえ渡りをする蝶として知られている。しかし、宗像では冬季アサギマダラの越冬幼虫が確認されており、地元産のアサギマダラも生息していることが分かっている。それゆえ、宗像で初夏見られるアサギマダラには南方から渡ってきた個体の外に地元産の個体も混じっているが、その識別は不可能である。

普通種であると言っても、モンシロチョウのように田畑へいけば何処でも何時でも見られる蝶ではない。では宗像では何処へ行けば観察できるのだろうか。5 月中旬～6 月上旬、さつき松原海岸（図 1 参照）へ行けば、運が良ければ 100 頭くらいを見ることができる。しかし、この数値は気象状況（天気、気温、風）に左右されるので、常にこの頭数が見られるとは限らない。次の機会は 9 月下旬～10 月中旬で、ヒヨドリバナやフジバカマが咲いている場所へ行けば出会える可能性が高い。それ以外の時期では、5 月～10 月城山、孔大寺山、湯川山（図 1 参照）の中腹以上で、樹間を縫うように緩やかに飛ぶ姿が見られることがある。

多くの蝶と同様に、アサギマダラも花を訪れる。それではどんな花に訪れるのだろうか、以下に季節を追って紹介していきたい。

2. アサギマダラの訪花植物

宗像市でのアサギマダラの初見は 4 月下旬である。筆者の蝶友の一人は、2015 年 4 月 25 日、湯川林道でシャク（セリ科）に訪花したアサギマダラのメスを目撃している。宗像市における初見記録として最も早いものである。この時期に蜜を吸うために訪れる花（蜜源）はほかにトベラ（トベラ科）がある。別の蝶友は鐘崎でトベラに飛来したアサギマダラを採集している（2015 年 4 月 28 日）。筆者も、2012 年 5 月 3 日、地島で海岸沿いに歩いていたとき、トベラに突然飛来したメス個体に遭遇した。図 2 にその写真を示すが、翅の損傷がなく、また鱗粉の剥げ落ちが見当たらず、羽化したばかりの個体のように見える。すると、この個体は地島で越冬した幼虫が蛹を経て、最近羽化した個体だろうか。しかし、地島には、冬季幼虫が食べる食草（寄主植物）キジョラン（キョウチクトウ科）の自生は確認されていない。対岸の鐘崎の織幡神社背後の小屋形山にはキジョランが自生し、越冬幼虫が確認されている。そこで羽化し、地島へ渡ったことが考えられるが、何のためにわざわざ海を渡って地島へ来る必要があるのだろうか。トベラで吸蜜するため？それなら、鐘の岬でもこの時期にトベラは咲いているので、地島へ渡る必要がない。ますます謎が深まっていく。

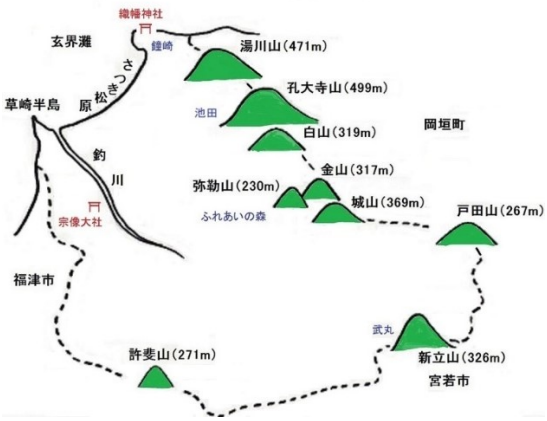


図 1　宗像市略図

図 2　地島泊地区でトベラに飛来　2012-5-3　筆者撮影

2012 年、西村光雄九州大学名誉教授（専門：植物生理学）から釣川河口右岸のさつき松原海岸にスナビキソウ（ムラサキ科）の群落があることを教えてもらった（図 1 参照）。アサギマダラのオスはスナビキソウの花からピロリジジンアルカロイド(PA)を吸汁摂取する。これは天敵に対する防御物質や性フェロモン生産のために必要である。また PA 未摂取では交尾できない。そのためスナビキソウが開花する 5 月中旬～6 月上旬に多数のアサギ

マダラのオスが飛来する。2012 年 5 月同地へ行くと、予測通りアサギマダラの集団飛来が見られた（図 3～5）。アサギマダラは寒さに弱いが、暑さにも苦手で、気温が上昇すると砂浜から姿を消す。それゆえ、朝 8 時頃までが観察に適した時間帯である。また、風の強い日には浜に出てこないで、背後の林に隠れていることが多い（図 6）。

図 3　さつき松原　2012-5-23 筆者撮影

図 4　さつき松原　2012-5-23 筆者撮影

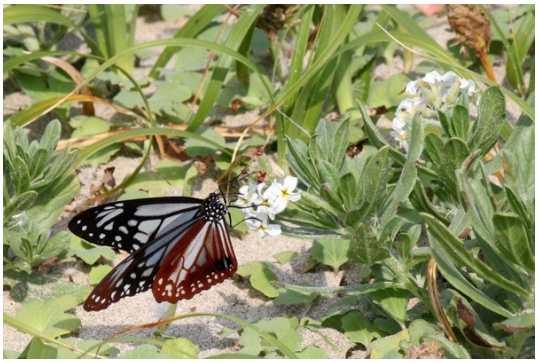


図 5　さつき松原海岸のスナビキソウで吸蜜
2013-5-26 筆者撮影

図 6　風の強い時にはさつき松原の林で休む
2015-5-26 筆者撮影

大分県姫島の海岸のスナビキソウに多数のアサギマダラが飛来する光景が度々新聞で紹介されているが、宗像市にもこれに似た光景が観察できる場所があることを多くの人に知ってもらいたく、博多昆虫同好会会誌「博多虫」にさつき松原の集団飛来光景を投稿し、公表した（西田・師岡 2012）。

図 7　　大島略図

図 8　大島・加代海岸の日陰のスナビキソウに飛来
2016-5-13 筆者撮影

スナビキソウはさつき松原海岸以外にも自生している。大島・加代海岸では 5 月中旬、日陰のスナビキソウに来たアサギマダラ 2 頭を目撃した（図 7 参照）。陽の当たる場所にスナビキソウがあるにも拘わらず、日陰に来るとはやはり暑さに弱いのだと思われる（図 8）。

大島には、岩瀬の沖津宮遥拝所下の海岸にもスナビキソウが見られ、アサギマダラが飛来する。また、本土側の宗像市内では、草崎半島西側にもスナビキソウがあり、アサギマダラの訪花を確認している（図 9）。

図 9　草崎半島西側のスナビキソウに飛来
2015-5-11 筆者撮影

6 月 10 日を過ぎると、アサギマダラはさつき松原海岸から姿を消す。多分、気温が高くなって、暑さに弱いアサギマダラは山中に入り込んだか、　あるいは北へ向けて旅立ったと思われる。

同時期に織幡神社（鐘崎、図 1 参照）の入り口にある半野生化したスイゼンジナ（キク科）が花を咲かせ、それに多くのアサギマダラが訪れる（図 10）。その理由は、スイゼンジナもピロリジジンアルカロイドを含むのでオスが摂取するために訪れるのである。

安部敏男氏（宗像市池田）は織幡神社のスイゼンジナに 20 頭以上のアサギマダラが飛来している光景を撮影記録している。

図 11　織幡神社のスイゼンジナな集まるアサギマダラ　安部敏男氏撮影・提供

筆者は 5 月～10 月、アサギマダラの優雅な姿に出会いたく、しばしば城山に登っている。それで城山のアサギマダラの生息状況を知りたくなり、2014 年 4 月城山におけるアサギマダラの目撃調査計画を立て、この企画を「城山を守る会」会長に持ち込んだところ、快諾して頂き、支援を貰うことになった。城山の山頂小屋の中に登山者名簿が置かれているが、その横にアサギマダラの目撃記録を記帳してもらうノートを置き、2014 年 5 月 1 日～2014 年 10 月 30 日の期間、一般の登山者に城山のアサギマダラの目撃調査に協力をお願いした。教育大登山口の小屋と山頂の小屋の両方の外壁に「城山を守る会がアサギマダラの目撃調査を支援している」とのポスターを張って頂いた。この企画で、多くの方から目撃記録が記帳されるとともに、3 名の方から城山山頂で撮影したアサギマダラの写真の提供を受けた。7 月には、このうちの

図 12　城山山頂でオカトラノオに飛来
2014-7-12　吉田信一氏（福岡市南区）撮影・提供

１人から城山山頂のオカトラノオ（サクラソウ科）に飛来したアサギマダラの写真が送られてきた（図 12）。

図 13　湯川林道でヨウシュヤマゴボウに飛来
2013-7-15 筆者撮影

筆者は 7 月、湯川山山麓を走る林道（標高 100m～200m）でヨウシュヤマゴボウ（ヤマゴボウ科）の花に飛来したアサギマダラを撮影記録した（図 13）。

この撮影の後、湯川山に登ったところ、山頂でアサギマダラの飛翔を目撃した。暑さが苦手のアサギマダラは夏季にはやはり涼しい山に逃げ込んでいるという印象を持った。

7 月には暑い平地から姿を消すと思っていたら、それを吹っ飛ばす光景に出会った。宗像市自由ヶ丘南 4 丁目に街路樹としてホルトノキ（ホルトノキ科）が 100 本ほど植栽されている。7 月に花をつけるので、2015 年 7 月調査に行くと、アサギマダラが吸蜜しているのを見つけた（図 14）。この暑い時期に平地で観察したことが驚きであった。

図 14　ホルトノキの花で吸蜜（自由ヶ丘南 4 丁目）
2015-7-23 筆者撮影

図 15　暑い時期に大島御嶽山で出会った
2016-8-10　筆者撮影

もっとも、訪花するのは涼しい朝のみだと思っていたら、気温が 25℃以上になる午後でも飛来し、吸蜜する光景が見られた。観察を続けると、2015 年 7 月 14 日～23 日に 8♂4♀、2016 年 7 月 8 日～7 月 21 日に 3♂2♀を観察し、撮影記録した。詳細は後述される。

8 月はアサギマダラを見る機会が減少する。しかし、筆者の城山山頂近くでの飛翔目撃の外、蝶仲間が許斐山と湯川山でも目撃している。さらに、筆者は大島・御嶽山山頂でも撮影記録している（図 15）。やはり、暑い夏は山に避難しているようである。

秋は活動が再び活発になる時期であり、日本本土から南方へ移動するアサギマダラが各所で見られる。さらにこの時期は、キク科のヒヨドリバナやフジバカマで吸蜜する光景が見られる。これらの植物もまた、オスが必要とするピロリジジンアルカロイドを多く含むので、オスが引き寄せられるようである。

図 17　復活した城山のヒヨドリバナに訪花
2016-9-23　筆者撮影

9 月中旬になると、城山山頂直下の斜面にヒヨドリバナが咲き、これに飛来する光景が見られる。2014 年 9 月、ヒヨドリバナに 2 頭が飛来している写真が送られてきた（図 16）。しかし 2015 年、城山愛好家の一部が、山頂からの眺望を良くするためと言って、ヒヨドリバナが生えている斜面の木々や草を全て刈り取った。そのため、その年はヒヨドリバナが消滅した。しかし 2016 年には復活し、斜面が再びヒヨドリバナで覆われるようになり、2016 年 9 月 23 日、筆者が城山に登るとヒヨドリバナは咲き誇っており、丁度そのときアサギマダラが飛来し、ヒヨドリバナで吸蜜を始めた。オスの個体である（図 17）。

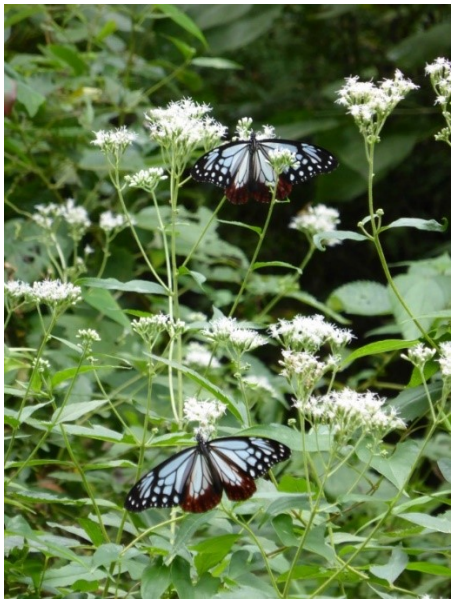


図 16　ヒヨドリバナに訪花（城山山頂）
2014-9-20 藤岡 潔氏撮影・提供

9 月下旬～10 月中旬、大島でもヒヨドリバナが咲き、それに飛来するアサギマダラを随所で見ることができる。特に、県道 541 号線や風の峠～御嶽山の区間、また加代分岐点～加代海岸の区間で道路脇に咲くヒヨドリバナに訪花する。ヒヨドリバナがあれば、そこに必ずと言ってよいほどにアサギマダラが訪れている（図 18）。

図 18　ヒヨドリバナで吸蜜するオス（大島）2016-10-14

大島では、ヒヨドリバナの外、キク科のヨメナ、ヤクシソウ、セイタカアワダチソウ、シロヨメナ、コセンダングサで吸蜜する光景が見られる。キク科植物は全般的にピロリジジンアルカロイドを含むので、オスが吸蜜するのは納得ができる。

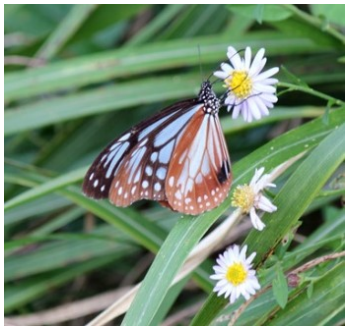


図 19　ヨメナで吸蜜（大島）
2014-9-29

図 20　ヤクシソウで吸蜜（大島）
2014-9-29

図 21　セイタカアワダチソウで吸蜜（大島）
2015-10-16

図 22　シロヨメナで吸蜜（大島）
2015-10-16

図 23 コセンダングサで吸蜜（大島）
2015-10-16

写真：筆者撮影

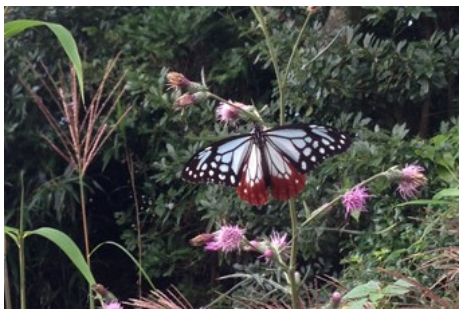


図 24　ヒメヤマアザミに飛来（城山山頂）
2014-10-5　仲家暢彦氏（宗像市）撮影・提供

非常に多くの個体が秋季、大島に集まるのは、本土各地から南方へ渡る途中に、大島に立ち寄ったと推測される。本土側の宗像市では、孔大寺山他多くの山でアサギマダラの幼虫の食草キジョランの自生があり、10 月～11 月、産卵が確認されている。その後孵化した幼虫は、そのまま越冬する。しかし、大島では、未だキジョランが確認されていないので、現段階では大島はアサギマダラの幼虫の越冬地でないと考えられる。

10 月城山山頂のヒメヤマアザミ（キク科）に来たアサギマダラの写真が送られてきた（図 24）。

城山ではヒヨドリバナの花期が終わった後の 10 月には、入れ替わってツワブキ（キク科）が咲き、それにも飛来する（図 25）。

また、各地の植物園や公園に植栽されたフジバカマに飛来するニュースが報じられるのも 10 月である。図 26 は自由ヶ丘南のフジバカマに飛来したアサギマダラである。

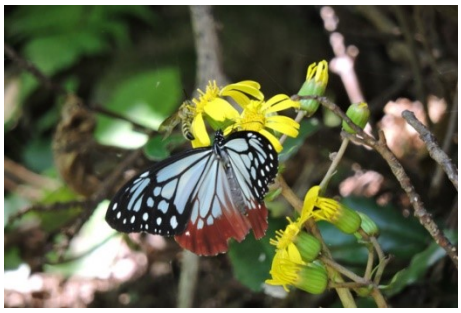


図 25　ツワブキで吸蜜（城山山頂）
2014-10-15　筆者撮影

図 26　フジバカマに飛来（自由ヶ丘南）
2013-10-18　筆者撮影

3. 宗像におけるアサギマダラ生息地

図 27　キジョランとその花

生息とは、その地で世代交代が行われていることである。生息地であることの手っ取り早い証明は幼虫を確認することであるので、その観点から宗像市内の生息地について見てみたい（図 1 宗像市略図参照）。

アサギマダラの幼虫は、宗像ではキジョラン（図 27）を食草（寄主植物）としている。宗像の山ではキジョランを容易に見つけることができ、その地がアサギマダラの生息地になっている。

湯川山：

2015 年 2 月、垂見峠からの登山道脇でキジョラン 9 株を見出した。食痕はあるが越冬幼虫の確認はできなかった。一方、山麓部の南面から西面、北面を走る湯川林道（標高 100m～200m）で 2016 年 3 月 3 日、安部敏男氏（宗像市池田）がキジョランでアサギマダラの越冬幼虫 2 頭を見つけ、撮影記録した。

孔大寺山：

2014 年 1 月 17 日、筆者は安部敏男氏とともに棚野の孔大寺神社遥拝所から登り、幼虫調査を行った。孔大寺神社まで 220m 地点～孔大寺神社の区間でキジョランと幼虫を確認するとともに、孔大寺神社本殿周りでもキジョランと幼虫を見出した。また、2014 年 5 月 13 日安部敏男氏とともに行った調査で、中腹で 2 体の蛹を確認した。時期考察から、この蛹は孔大寺山で越冬した幼虫が蛹化したものであると考えられる。さらに 2014 年 7 月 11 日にも同じ場所で 1 体の蛹を見出したが、これは南方から飛来した個体または地元産の個体が 6 月頃に産卵し、それから蛹化したものであると考えられる。

図 28　アサギマダラの蛹　孔大寺山中腹
2014-5-13　筆者撮影

金山：

2014 年 4 月 16 日、地蔵峠側から金山へ登った際の調査では、キジョランの自生を確認するとともに、幼虫 1 頭（15mm）を見出した。これにより金山も宗像市におけるアサギマダラの発生地の一つであると考えられる。その後、金山北岳～南岳の区間でも調査を行ったがキジョランは見いだせなかった。また、金山南岳から石峠のまでの区間は未調査である。

弥勒山：

2013 年 10 月、宗像植物友の会の黒川康子氏から、弥勒山にキジョランがありアサギマダラの幼虫がついていた、と聞いていたので、2014 年 2 月 21 日、安部敏男氏とともに調査する。中腹の石仏までの区間で、多数のキジョランと幼虫 3 頭（20mm1 頭、10mm2 頭）を確認したが、石仏から山頂までは開放空間で明るく、キジョランの生育環境ではないことが分かった。

城山：

2012 年 1 月 8 日、一般登山道脇でキジョランに付いた　幼虫を確認して以来、自然周回道も含めて卵、幼虫を確認している。また、2013 年 1 月 15 日、岡垣側登山口（上畑）付近の竹林内で多数のキジョランと幼虫を見出した。さらに 2016 年 5 月 18 日、山頂～石峠間でキジョランが多数あるのを確認し、その後 2017 年 1 月 11 日の調査で幼虫を見出した。

図 29　アサギマダラの卵（城山）
2013-10-30　筆者撮影

白山：

宗像アサギマダラの会の土肥数利氏、安松亮一氏、花田敏彦氏（宗像市）が 2015 年 12 月 23 日、1 齢幼虫 3 頭を確認した。

許斐山：

2012 年 4 月 9 日、山頂直下に馬場に使われたといわれる広場で 10 株ほどのキジョランを見出し、幼虫 1 頭を撮影記録したが、それ以降幼虫の確認はできていなかった。しかし 2016 年 1 月 4 日、山頂近くの登山道の谷側斜面でキジョランの大きい株を発見し、それに付いている 3 齢　幼虫 1 頭（図 30）とその近くの小さい株についている 2 齢幼虫 1 頭を確認した。

図 30　アサギマダラ幼虫（許斐山）
2016-1-4　筆者撮影

新立山：

2014 年 6 月 9 日、安部敏男氏とともに、宗像側からの 2 本の登山道でキジョラン調査を行なったが、見いだせなかった。その後、2015 年 12 月 14 日、平山口からの登山道が正助ふるさと村貸農園側からの登山道と合流する手前で、キジョラン 4 株を見つけ、そのうちの 1 株に 18mm の幼虫 1 頭がついていた。また 2016 年 2 月 24 日、同じ場所で、前回発見した幼虫のついたキジョランとは違う場所のキジョランで 2 齢幼虫 1 頭を見つけた。

鐘の岬：

2014 年 3 月 12 日、宗像市鐘崎の織幡神社境内とその背後の鐘の岬（小屋形山）でキジョランと幼虫の調査を行なった。本殿裏から鐘の岬の境内林に入る入口付近に 5 株のキジョランを確認するが、いずれにもアサギマダラ幼虫はついてない。キジョランは林内のあちこちに見出されるが葉裏を調べても幼虫は見つからない。林の中の小径から外れた場所に食痕のあるキジョランを見つけ、葉裏を調べると 3 齢幼虫 1 頭を確認することができた。本殿と鳥居の間に末社の今宮社がある。この祠の上の斜面にキジョラン 6 株を確認したが、幼虫は見出せなかった。

ふれあいの森：

宗像アサギマダラの会の土肥数利氏（宗像市）がキジョランの大きい群落地を見つけ、幼虫も確認した。詳細は本号の前田秀敏氏の報文を参照されたい。

4. アサギマダラの謎　―その 1 ―

アサギマダラは暑さが苦手だと言われている。そのため、初夏に北上するのは涼しい場所を求めるためである。また、宗像市内で 7 月、8 月に目撃されるのは、湯川山、孔大寺山、城山などの山頂の比較的涼しい場所である。ところが、7 月に平地で見られる場所がある。自由ヶ丘南 4 丁目の街路樹にホルトノキが使われており、7 月に房状の白い花を咲かせる。それに飛来し、吸蜜する光景が観察される。2015 年及び 2016 年にホルトノキに訪花したアサギマダラの記録を下に示す。但し、―は調査しなかった、0 は調査したがアサギマダラの訪花がなかったことを示す。

7 月	2015 年	2016 年	飛来時間
8	―	1♀	13.54
9	0	―	
10	―	―	
11	0	1♀	15.55
12	―	1♂	10.27
13	―	0	
14	1♀	0	13.35
15	―	0	
16	―	0	
17	―	0	
18	―	0	
19	3♂1♀	1♂	8.32～9.31 (2015), 7.17 (2016)
20	―	―	
21	2♂	1♂	13.35～14.16 (2015), 7.46 (2016)
22	―	―	
23	1♂3♀	―	10.10～10.40, 13.54

上の訪花表から分かるように、涼しい午前中の早い時間帯だけではなく、外気温が 25℃以上になると推定される午後にも飛来が見られた。何故外気温の高い平地でホルトノキに飛来するのか、謎である。飛来するのはオス、メス両方が確認されている。

5. アサギマダラの謎　―その 2―

大島では、9 月末～10 月中旬、ヒヨドリバナやその他のキク科植物に多数のアサギマダラが訪花するのが確認されている。オスのみならず少数ではあるがメスも確認されている。これらは南西諸島、台湾など南方へ旅する途中に立ち寄ったと考えられる。鈴木光氏（日本鱗翅学会）が大島のキジョランの生育環境と思われる一帯を隈なく探索したが見つけられなかった。それゆえ、メスが産卵のために立ち寄ったとは考えられない。

図 31　大島のコイケマ　2016-7-23　筆者撮影

それでは何のために立ち寄ったのだろうか？さらに大島では 7 月にメス、8 月にオスが確認されている。これらは大島の外から飛来したのか？あるいは大島産なのか？大島産ならば、島内にキジョランがあるはずだが、前述のように未だ発見されていない。キジョランと同じようにアサギマダラの食草となるコイケマ（キョウチクトウ科）が自生しているのは確認済みであるが、コイケマ（図 31）で卵、幼虫などは未だ見つけられていない。なお、コイケマは冬季地上部が枯れるので、キジョランのようにアサギマダラの幼虫の冬季の食草とはなり得ない。

6. マーキング

捕獲したアサギマダラの裏翅に捕獲者名、捕獲日、捕獲場所などのデータをサインペンで書いて放す。その個体が再び捕獲されると、始めの捕獲場所から再捕獲場所まで、どのルートをどれくらいの時間で移動したかが分かる。これをマーキングと言い、初夏の台湾、南西諸島から本土への北上期と秋の本土から南西諸島、台湾への南下時に多くの方がマーキングを行い、アサギマダラの移動ルートの解明に取り組んでいる。

安部敏男氏は 2013 年 10 月 20 日、自宅庭（宗像市池田）のフジバカマに飛来したアサギマダラ♂を撮影したら、マーキングがされており、左翅裏に「のっぺ　9/23　TMS4416」がはっきり読み取れた（図 32）。マーキングに詳しい博多昆虫同好会会員の方に調べて頂いたら、この個体は 2013 年 9 月 23 日、島田武志氏（琵琶湖バレーアサギマダラの会）が長野県大町市のっぺ山荘でマーキングしたものであることが判った。マーキングから再確認まで直線距離 732km を 27 日間で移動したので、1 日当たり 27km を飛行したことになる。実際は直線飛行したのではなく、あちこち寄りながら移動したので、1 日当たりの飛行距離は 30km 以上になると推測される。さらに 2014 年 10 月 19 日にも、安部氏の自宅庭のフジバカマにマーキングされたアサギマダラ♂が飛来した。撮影画像から「9/10 10 白山 Eiko」のマーキングが認められた（図 33）。再度博多昆虫同好会会員に調べて頂いたとこ

ろ、2014 年 9 月 10 日、石川県白山市白峰で橘英子氏によりマーキング、放蝶されたことが判明した。その間の距離 606km を 39 日間で移動したことになり、1 日の平均移動距離は約 15km となることが分かった。

マーキングされたアサギマダラ（安部敏男氏撮影・提供）

図 32　2013-10-20

図 33　2014-10-19

宗像市における最近のマーキング個体の再捕獲記録は、本特集で前田秀敏氏による報文で紹介されている。

7. まとめ

5 月中旬～6 月上旬、さつき松原海岸に集まる多数のアサギマダラは、南方から渡って来た個体の外、地元産の個体も混じっていると思われる。その後、夏の暑さを避けるため、北へ移動する。この後、産卵の季節となるが、地元産のアサギマダラのみが宗像で産卵するのか、それに南方から渡って来たメスも加わって産卵するのか、非常に興味ある問題であるが、個体識別が不可能であるので、その問題の解明は当分不可能であろう。また、地元産のアサギマダラも北へ移動するのか？その解明には、多数の越冬幼虫を飼育し、初夏羽化した

アサギマダラ成虫にマーキングを施して放蝶する。それが再捕獲されることにより、移動するのか、宗像に滞在し続けるのかが解明されるだろう。

アサギマダラはまだ多くの謎を持っており、常に興味を抱かせる蝶である。

謝辞

城山山頂のオカトラノオ、ヒヨドリバナ、ヒメヤマアザミに飛来したアサギマダラの写真を提供して下さった吉田信一氏（福岡市南区）、藤岡 潔氏、仲家暢彦氏（宗像市）及び織幡神社入り口のスイゼンジナに飛来した多数の個体の写真とマーキング個体の写真を提供して下さった安部敏男氏（宗像市）に厚く御礼申し上げます。また大島調査の際にいつも同行して下さった鈴木 光氏（福岡市東区）にも心より感謝申し上げます。さらに同氏から大島でのキジョラン調査とコイケマ調査の結果の提供を受けました。重ねて御礼申し上げます。

参考文献

西田迪雄・師岡和則：宗像市のアサギマダラ集団飛来地，博多虫 No.15 p.83，
博多昆虫同好会（2012）.

謎の蝶アサギマダラ

宗像アサギマダラの会　前田　秀敏

1. アサギマダラはどんな蝶?

アサギマダラ（浅葱斑、学名：*Parantica sita*）　はチョウ目タテハチョウ科マダラチョウ亜科に分類され、翅の模様が鮮やかな大型のチョウで、長距離を移動する。

翅の白い部分が「浅葱(あさぎ)色」であることから「アサギマダラ」と呼ばれています。浅葱色とは日本古来の色名で、神主の袴の色でもある淡い空色のことです。アサギマダラの半透明の羽は太陽に透かすと水色に見えます、水色の部分は鱗粉が無いので、マーキング(標識)ができます。(以下標識と表記する)

その蝶が移動し各地で再捕獲されたことから移動することが分かりましたが「何故移動するか」その生態は分かっていませんので、全国の研究者や愛好家が調査研究に取り組んでいます。

2. アサギマダラが好きな花

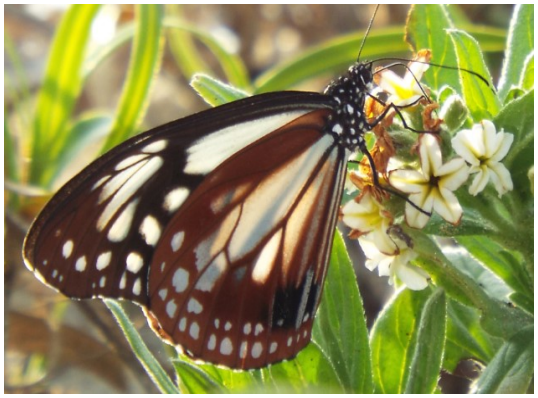
2-1. 蝶の移動と主な花

蝶は春に台湾・沖縄本島を含めた其々の島から北上を始め、宗像には５月に海浜性植物「スナビキソウ」に飛来します。北に向かう蝶は世代交代をしながら、東北の山形や福島まで北上します、昨年の例ですが大分の姫島で小学生が標識した蝶が北海道で再捕獲されました。その後秋になると反転し南に向かって移動を開始しますが、反転のタイミングは分かっていません。気温が高くなると生息に適した温度の地域に移動するというのが定説です。（宗像には９月末から１１月上旬の期間に「フジバカマ」に飛来します。）

2-2. **スナビキソウ.**

ムラサキ科の多年草(学名 *Messerschmidia sibirica*)。茎は高さ 30～50 センチメートル。葉は密に互生し、倒披針(とうひしん)形から長楕円(ちょうだえん)状披針形。5～8 月、茎頂に白色で芯(しん)が黄色い、香りのある 5 弁花を密集して開く。海岸の砂地に生え、北海道から九州、および朝鮮半島、シベリア、ヨーロッパに分布する。名は、砂地で地下茎を伸ばすことによる［1］。

スナビキソウ 2016-5-15　釣川河口江口浜



海岸のスナビキソウで吸蜜のアサギマダラ

５月に北上する蝶は、海岸に自生するスナビキソウに飛来しますが特にオスが好んで吸蜜に来ます。この花にはピロリジジンアルカロイド(PA)という毒性の成分が含まれていますが、この成分がオスには必要な成分です。

オスはこの成分を利用して体内でメスを呼ぶ性フェロモンを作ります、この性フェロモンをヘアブラシで羽根の性標に塗りフェロモンの香りでメスに迫ります、不足するとメスに求愛行動しても相手にされません。

スナビキソウに飛来するのはオスが多くメスはわずかです、メスは特に好みの花は無く他の花で吸蜜している姿を目にします。１０月に南下の蝶はフジバカマの蜜を求めて飛来しますがこの花にもＰＡが含まれています。

2-3. **スナビキソウの分布**

宗像及び周辺では津屋崎海岸、白浜海岸、勝浦浜、釣川河口江口の海岸、筑前大島海岸で自生を確認しました、宗像から若松までの玄界灘海岸にも自生しているとの報告がありました。

出雲、舞鶴、北海道の海岸での自生をアサギマダラの全国ネットワーク(アサギ ML)会員の方々から直接聞き取り調査をしました、全国の海岸に分布しているようです。

2-4. **フジバカマ**

キク科ヒヨドリバナ属の多年生植物（学名 *Eupatorium japonicum*）。秋の七草の 1 つ。本州、四国、九州、朝鮮、中国に分布している。8-10 月、散房状に淡い紫紅色の小さな花をつける。フジバカマは環境省のレッドリストで準絶滅危惧（NT）種に指定されており、家庭の庭に植えてあるのはすべてフジバカマとサワヒヨドリの雑種だとの説があるが詳細は不明です。山田ホタルの里に園芸種のフジバカマ園を作って飛来調査をしているが、園芸種の種からは発芽しないと言われています。京都に原種を保存している方が居られその方から苗を譲ってもらい育苗試験をしているが、生育は良く花が付いたが花季が２０日間ほど早いのが分かりました。

2-5. **ヒヨドリバナ**

キク科ヒヨドリバナ族（学名　*Eupatorium makinoi* ）の多年草。日本各地の林道の脇、草原や渓流沿いなどの日当たりの良い場所に自生する。ヒヨドリが鳴く頃に開花することから、この和名になったとされる。

筑前大島の御嶽山展望台に上る車道横の山側斜面に自生している、城山、湯川山にも自生しているが数は少ない。島の住人は昔からアサギマダラが来ているのは知っており、すごい数の蝶が乱舞している時期もあったとの証言もあるが、2015 年蝶の来る時期 10 月上旬に調査と標識に行ったが、車道脇のヒヨドリバナは雑草の草刈りで花は残っていなかった。

大島のヒヨドリバナ

刈り取り時の識別用に標識をつけた

今年は蝶の飛来のピークが終わるまで草刈りの時期を２週間ほど遅らせてくれるよう宗像市大島支所に依頼したら快諾戴きアサギマダラを迎えることができました。

3. 何故移動するのか

移動には温度が大きく関係しています、正確には分かっていませんが、高い温度を避けて移動するというのが定説です。台湾や沖縄から長い距離の海を渡ることは温度だけともいえないかも知れません。

５月早朝釣川河口で観察しましたが、５時５０分にすでに吸蜜に来ている蝶を観察しました、気温は１４度でした(１５℃までは動きが悪いのが定説)。１８℃を過ぎると林間から飛来し始め、２０℃になると飛来はピークになりました。温度が高くなると次第に数が減り、２５℃に近づくころには急激に減少し林間に飛び去ります。

秋の南下時、フジバカマ園でも同じ行動をとりますが、２５℃過ぎてもフジバカマの花陰で日差しを避けて吸蜜している蝶も見られました。

3-1. 長距離移動実績－no.1 宮崎から宗像に飛来

５月の移動は北上にあたります、４月末に鹿児島の喜界島での報告がありましたので、鹿児島、宮崎と北上した固体が飛来したのかもしれません。これは 2015 年宗像アサギマダラの会が活動を始めての記念すべき初の再捕獲になります。

岩崎氏（宮崎）より(アサギ ML)に移動報告された情報

(1)　標　識:MIYA　5/15　GAN67

(2)　性　別:♂(新鮮個体)

(3)　標識地:宮崎県宮崎市本郷北方　池田

(4)　(4)　標識日:2015年5月15日　　9:40

(5)　標識者:岩﨑郁雄

(6)　備　考:自宅のスイゼンジナへ飛来　画像有

↓　北北西へ326km　10 日間

(1)　再捕獲地:宗像市江口釣川河口右岸海岸段丘

(2)　再捕獲日時:2015年5月25日　18:30

(3)　再捕獲者:中川杏菜(日赤国際看護大)

(4)　報告者:前田秀敏

(5)　再標識:ムナカタ　5/25 HIDE3　で放蝶

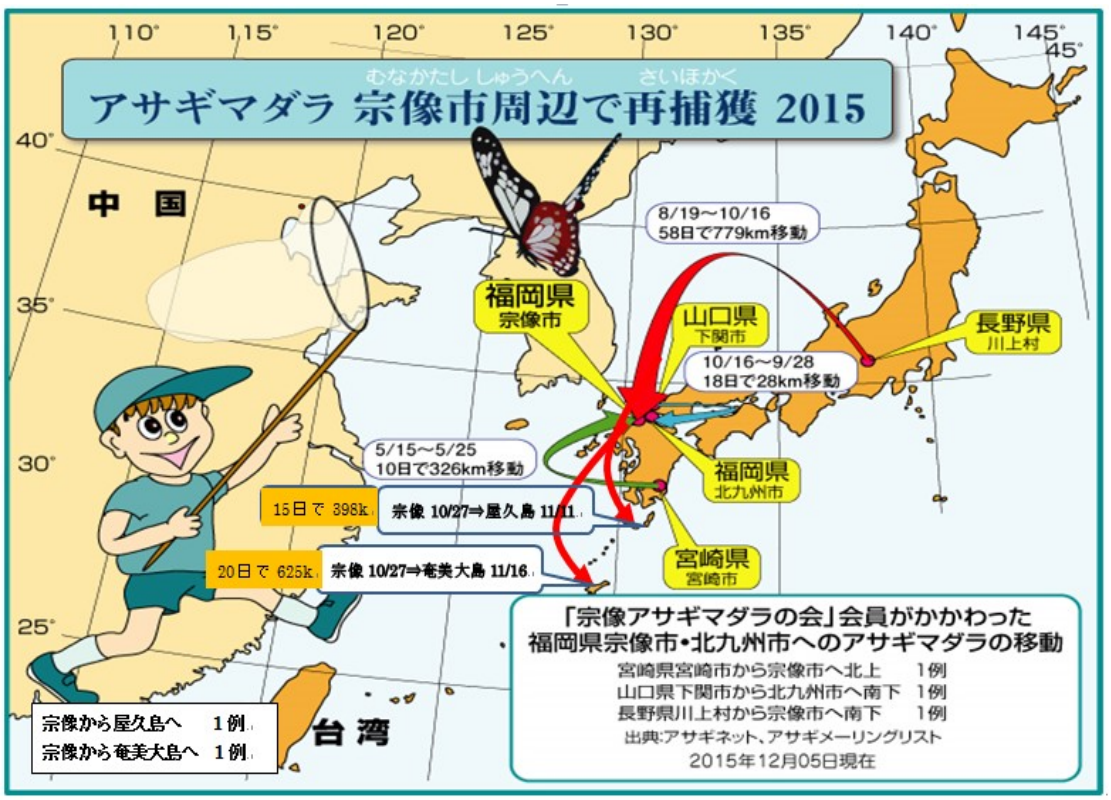
追記者:前田　画像有

2015.5.15 宗像で再捕獲したアサギマダラ)

再標識をして放蝶

移動ルートとしての宮崎の位置づけは、鹿児島⇒宮崎⇒大分（姫島）⇒四国⇒岐阜⇒長野のルートがあるようです。宮崎から宗像へのルートは珍しい出来事と思います。　鹿児島から長崎・福岡という東シナ海を通過する例はまだありません。というか活動する人がいないのでルート解明ができないと言ったが良いと思います、宗像で活動するのは東シナ海ルートの解明に役立つものと確信します。

3-2. 長距離移動実績－no.2 宗像から屋久島・奄美へ移動（南下）



２０１５年の宗像に関する移動図　長野田原氏制作

１）　長距離移動実績－NO2　　（宗像より屋久島・奄美大島への移動報告）

宗像アサギマダラの会を代表して　筆者が(アサギ ML)に報告した内容

◆福岡県宗像市山田 10/27　⇒　鹿児島県熊家毛群屋久島町 11/11

(1)　標識　:MU･YA　10 27 OHK 04

(2)　性別　:♂　新鮮度:N

(3)　標識日:2015 年 10 月 27 日

(4)　標識地:ふれあいの森北斜面　フジバカマ園

(5)　標識者:大久保　靖代

備考　:フジバカマに訪花。画像なし

↓15日間に、南西方向に 398.4km 移動

画像提供：屋久島久保田義則氏
2015-10-27 大久保靖代さんが宗像で放蝶

(1)　再捕獲情報:屋久島－17

(2)　標識:MU･YA 10 27 OHK 04「･」は文字かもしれない

(3)　性別:♂　新鮮度:N　前翅長 5.6cm

(4)　再捕獲日:2015 年 11 月 11　日　12 時 55 分　曇

(5)　再捕獲地:鹿児島県熊毛郡屋久島町原･神山小付近

(6)　再捕獲者:久保田義則

メモ：ヒヨドリバナ訪花中。「YAKU　11/11　YK-1175」を追記放蝶。

◆福岡県宗像市山田 10/27　⇒　鹿児島県奄美市住用　　東仲間～三太郎峠の林道 11/16

（20 日間に、南西方向に６２６km 移動）

(1)　標　識　：MU･YA　MAE ･25　10/27

(2)　性　別　：♂　新鮮度　：N

(3)　標識日　：2015 年 10 月 27 日

(4)　標識地　：山田ふれあいの森北斜面

山嵜氏フジバカマ畑

(5)　標識者　：前田秀敏

備　考　：フジバカマに訪花。画像なし。

↓20 日間に、南西方向に626km 移動

標識記号:MU･YA　MAE ･25　10/27

筆者が宗像で放蝶したものを奄美で捕獲された
画像提供：奄美尾張勝也氏

(1)　再捕獲日:2015 年 11 月 16 日

(2)　再捕地:鹿児島県奄美市住用　東仲間～三太郎峠の林道

(3)　再捕者:尾張勝也

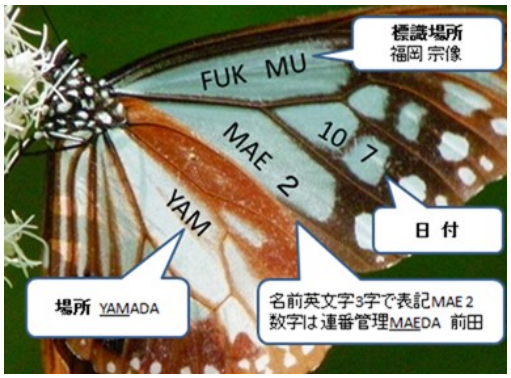
(4)　性別:♂　捕獲状況:ヒヨドリバナ訪花中

備考 「アマミ　ラララ 271　11/16」追記放蝶

画像あり　　出典:アサギML

3-3. 新標識に

蝶を捕獲して標識を書くことをマーキングと云います、標識蝶を他の地域で再捕獲した情報を全国のメーリングで知らせて共有します。



標識は 2016 年より下図のように標準化しました、外国を含む各地の活動家が捕獲しネットワークで報告してくることから福岡県内は FUK を宗像は MU にし簡単な識別にしました。

4. 食草

幼虫はツル性の「キジョラン」の葉を食べて成長しますので、メスの成蝶は林間のキジョランを探して葉の裏側に産卵します、この植物以外には産卵しません。同じキジョラン科に「カモルヅル」、「イケマ」等がありますが冬は枯れます。宗像付近では冬も枯れないキジョランに産卵します。

2016.2.15 キジョラン　ふれあいの森

2016.12.18 キジョランの実　織幡神社

食草の選択行動　：　アゲハチョウの仲間は、それぞれの幼虫が特定の植物のみを食草として利用するので、メス成虫が正確に植物を識別して、産卵場所を間違えないことが次世代の生存を左右する。メス成虫はどのようにして数多くの植物の中から幼虫に適した食草を選択しているのかというと、そのヒミツは前脚の先端にある『跗節（ふせつ）』と呼ばれる部分にある。

跗節には化学感覚子があり、植物に含まれる化合物を認識することができる。アゲハチョウのメス成虫は、産卵の前に植物の葉の表面を前脚で叩く『ドラミング』と呼ばれる行動を示すが、その時に植物に含まれる化合物（味と考えれば解りやすい）を感じ取っている[2]。

5. 蝶の交尾

ピロリジジンアルカロイドを含む蜜を吸ったオスは林間でメスを探します、城山や湯川山の頂上付近を集団で飛んでいるのが目撃される時が有りますが、山に発生する上昇気流に乗って頂上付近に移動し集団でのお見合い(交尾行動)が行われているのかもしれません。

捕獲したオスのおなかを触るとゴツゴツした感触がありますが、これは精嚢が発達したものです、またメスを捕獲したらおしりの先の産卵口のすぐ上にある交尾痕を見ますが、1mm ほどの横線があるのが見えますがこれが交尾痕です、交尾痕があるメスのおなかを触るとゴツゴツした触感があります、これは卵を抱えているものです。

蝶の研究もさることながら、成蝶になるのが 1/100 と云われていることから育てて放蝶される方も多いようです。宗像アサギマダラの会でも多くの会員が幼虫を育て画像レポートで報告しました。

5-1. オスとメス・交尾痕

(1)交尾痕

右図はオスとメスの画像ですが、メスのおしりの先端より少し上の黒い横線が見えますが、これが交尾時にできる交尾痕です。左の黒っぽいのがオスで右の白っぽいのがメスです。

2015-10-16　門司白野江植物公園

(2)オスとメス

アサギマダラのオスとメスを見分ける方法は下の翅にある黒い模様（性標）で見分けます。私たちが見分ける時には、捕獲した時にこの黒い模様を見て判断します。メスの場合はおしりを見て交尾痕を見ます。そしておなかを触って卵を持っているかを判断します。

オスは黒いしるし(性標)があります

2016-10-14 山田ホタルの里

メスにありません

2014-5-16 脊振山頂

2015-10-16　門司白野江植物公園

5-2. 求愛行動

オスがＰＡの花蜜を吸うと体内で性フェロモンを生成します。その性フェロモンをおしりから　出したヘアーペンシルで翅に塗り匂いフェロモンを拡散させメスに求愛をします。

オスの求愛行動は翅をバタバタさせてフェロモンを拡散させながらメスに近づきます。メスがオスを認めれば交尾行動が始まることになります。

次の画像は宗像アサギマダラの会の平松秋子会員（宗像市）が育てたメスと大久保靖代会員（宗像市）が育てたオスを平松さんのところに連れて行きお見合いをさせた時の画像です。

A

B

画像Ａはオスが翅をばたつかせてメスに求愛行動をしている様子です。次の画像Ｂはメスが相手にしないのであきらめた様子です、メスとの距離感が物語りますね。（精嚢の発育には羽化後１週間ほどかかり紫外線を受けて成熟するといわれています）

この数日後山田ホタルの里で放蝶しました、２頭とも元気に飛び立ちました。

6. アサギマダラの害敵

ヤドリバエの寄生と捕食

自生のキジョランにはヤドリバチの卵が産みつけられており、アサギマダラの幼虫が葉と一緒に食べると寄生されることになります。山でサナギを見つけると茶色に変色したもの

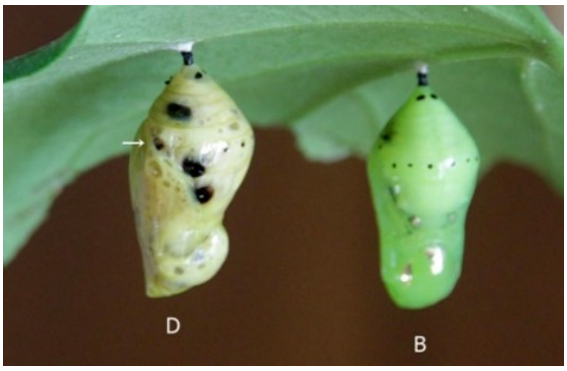
や茶色の斑点があるものがありますが、これが寄生した卵が体内で孵化し蝶の体内で成長している証拠です、その後サナギに穴を開けてドロリとした体液と一緒に外に出ます。ヤドリバチの幼虫は地上でサナギになり羽化するようです。

アサギマダラは他の生物に捕食されます、鮮やかな斑点模様は毒があることを表示する警戒色と云われていますが、４mm を超すような幼虫が育っているのを観察していると、次の日に行くと消えています、周りをさがしても見つからない場合が多いのですが、鳥に捕食されているように思われます。

他にクモにも捕食されているという報告もあります。「寄生バチ（キセイバチ、ヤドリバチ）はハチ目のうち、生活史の中で、寄生生活する時期を持つものの総称である。分類学的には、ハチ目ハチ亜目寄生蜂下目 Parasitica に属する種がほとんどであるが、ヤドリキバチ上科（ハバチ亜目)、セイボウ上科（ハチ亜目有剣下目）など、別の分類群にも寄生性の種がいる 。

寄生されたサナギ　2016-1-19 ふれあいの森

参考：キスジグセアカカギバラバチ　体長 10mm 卵　出典：[3]



ヤドリバエ に寄生された蛹と羽化のハエ　山本氏（周防大島）提供

7. アサギマダラの成長

7-1. 卵から幼虫

蝶はキジョランの裏側に卵を産卵します、一枚の葉に一個の卵を産みますが、この卵は別の蝶が生んだ卵と思われます。卵から羽化までアサギマダラの観察をしました。

メスの蝶は葉の裏側に産卵します。孵化後1-2mm の幼虫(右図右)は葉を円形に噛み痕をつけて白い粘液を出した内側を食べます。(右図右)は2 齢 10mm ですが 4 齢 40mm まで育ちます。

卵は 1 mm 2016-10 大久保氏提供

1 齢の幼虫 2015-10-15　城山山麓（岡垣町上畑）

大きさの呼び方は１齢から４齢と終齢という呼び方をします。

7-2. 幼虫の大きさ

卵から孵化したものを１齢と呼び、キジョランの葉を食べて大きくなり次の脱皮をします。大きさはスケールを当てます。触れば縮むので正確ではありませんが概ね以下のとおりです。

１齢：３から４mm	：卵から孵化してからすぐ葉を食べ始めます。
２齢：５mm１０mm	：頭が黒くまだら模様はまだ見えない。
３齢：１０mm２０mm	：黒いヘッドキャップが取れているので３齢と分かります。
４齢：３０mm４０mm	：葉を１枚食べてしまうほどの食欲で一気に大きくなります。
終齢：５０mm 程度	：一気に食べ大きくなりそわそわ動きぶら下がる場所を探します。

１齢幼虫黒いヘッドキャップで識別　２016-1-5

２齢と４齢の幼虫ふれあいの森　2016-1-5

上図右の葉に穴があいているのは幼虫の食べた跡、葉を丸く噛んで白い葉液を出して内側の葉を食べます。葉から出る液体は粘りが強く幼虫にとっては苦手なのかも知れません。終齢になると葉の根元の茎の部分を半分ほどカジり、粘液を止めて葉を１枚食べてしまいます。

7-3. 前蛹から蛹

口から糸を出し尻尾を固定させぶら下がります、その後サナギになります。

前蛹　2015-12-5

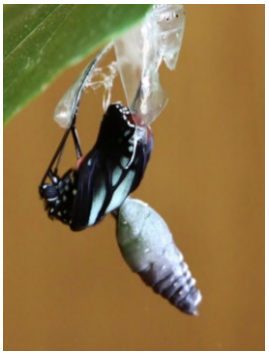
蛹 2015-2-7 大久保氏提供

羽化前は羽根が見える 2016-1

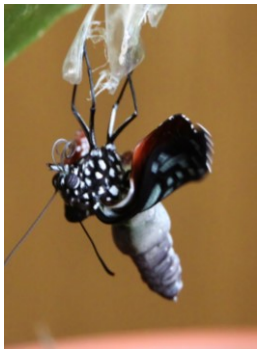
7-4. 羽化

羽化前サナギが黒くなり殻がパチっと割れて羽化が始まりました。

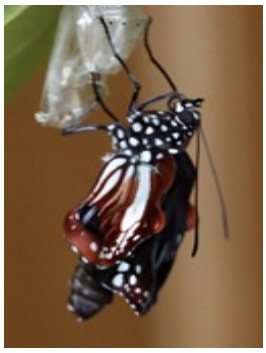
（写真：大久保靖代氏提供）



頭が出てから尻尾が
ピョンと飛び出した



ハネを伸ばし始め
体位を変え始めた



体位を変え 頭を上にした

ハネをいっぱいに伸ばした

ハネを数時間かけてのばしましたが飛び立つまでは時間がかかるようです。

8. アサギマダラ風に乗る

フジバカマ園に来ているアサギマダラの様子を観察していると、蝶は蜜を吸い終えしばらく羽ばたいていると思うと風に乗り優雅に滑空します、木立の梢付近の風に乗ったらたちまち見えなったりします。

では長距離をどのように移動するでしょうか、捕獲した蝶の翅を見ると翅がきれいな蝶と模様が擦れている蝶、また翅がボロボロの蝶がいたりします。時々生まれたばかりのような、翅の模様もくっきりした蝶が長距離を移動しているのが見つかったりします。

翅を見てきれいな「N」、すこし擦れて居る「M」、傷んでいる「O」とネットワークに報告しますが、翅が傷んでいるのをみると遠くから苦労して飛んできたと判断します。

大阪自然史博物館の金沢氏が主宰する「アサギ ML」で全国の愛好家が標識情報を交換しているメーリングリストがあります、その中で驚異の移動報告がありましたので紹介します。2015 年に長崎から 3 日で 1,110ｋｍの移動した驚異の蝶が与那国島で捕獲の報告が届きました。

長崎県野母崎 10 月 14 日 9:27　⇒

八重山郡与那国島 10 月 17 日　3 日で 1,110Ｋｍ

8-1. 再捕獲の情報　（与那国島で再捕獲）

以下は「アサギ ML」に現地で捕獲し【再捕獲情報】として投稿されたものです

[asagi:025867]【再捕獲情報】

与那国島・宇良部岳「10・14（または 16）B ナガサキ バイオ 2483」

伊藤雅男さん、みなさん、河野@三重県津市です。

与那国島に滞在中の青木一宰さんから再捕獲の情報が寄せられました。

再捕獲地：与那国島・宇良部岳

再捕獲日：2015 年 10 月 17 日

捕獲個体：♂「10・14（または 16）

B ナガサキ バイオ 2483」

再捕獲者：青木一宰

10 月 16 日にマークされたものだとすると 1 日で 1,000km 以上飛んだことになりますが、10 月 14 にマークされたものだとしても速いと思います。

再捕獲地：与那国島・宇良部岳

青木さんからの依頼により、写真を添付しました。確認おねがいいたします。

8-2. 移動情報　（再捕獲情報をもとに標識者が移動情報を出したもの）

長崎県野母崎樺島灯台で伊藤雅男・昭子さんが標識後放蝶され、再捕獲情報の標識の確認をされ、アサギ ML に「移動情報」として報告されたものです。

[asagi:025871]　【移動情報】長崎県野母崎→与那国島・宇良部岳

河野様、アサギメールの皆様
長崎県西海市の伊藤です。
河野様ご連絡ありがとうございました。
再捕獲をしていただいた青木一宰様にもよろしくお伝え下さい。
日にちの部分が書き間違いをしておりご迷惑をお掛けしました。
正しくは１０月１４日です。
それにしても早い移動記録ですね。時期としても早いと思います。
移動データは以下のとおりです。

長崎野母崎 10 月 14 日９：２７⇒与那国島 10 月 17 日　3 日で 1,110Ｋｍ
標識：　バイオ 2483　Ｂ　ナガサキ　10/14
性別：　♂
標識日：　2015 年 10 月 14 日９：２７
標識場所：　長崎県長崎市野母崎樺島灯台
標識者：　伊藤雅男・昭子
備考：　ヒヨドリバナに訪花
　　鮮度Ｍ　破損は右後翅にあり
　　当日は５１６頭の標識を夫婦で行ったほど個体数は多かった。
　　↓
　　移動距離；１１１０ｋｍ
　　↓
再捕獲地：　与那国島・宇良部岳
再捕獲日：　2015 年 10 月 17 日
捕獲個体：　♂「10・14　Ｂ ナガサキ バイオ 2483」
再捕獲者：　青木一宰

8-3. 風にのる（この移動を風の解析と気象図で判断）

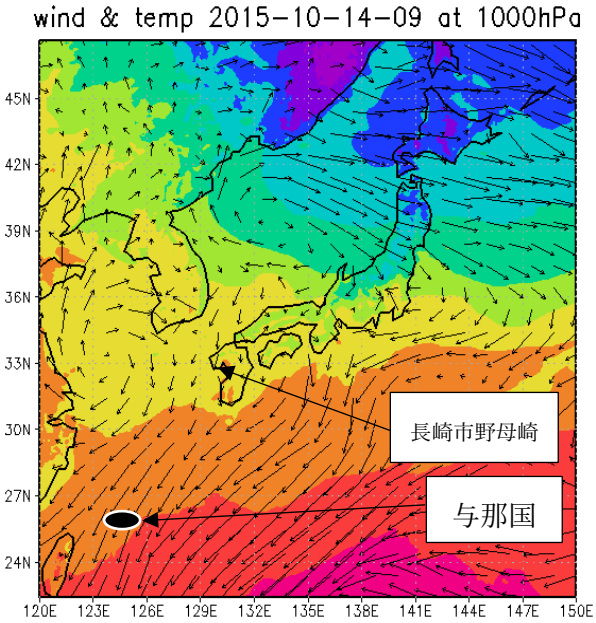
風の解析をしてくれた神奈川の佐藤氏が「解析図」を作り公開してくれました。

[asagi:026078] 風の図です。

アサギのみなさまこんにちは、佐藤と申します。神奈川県、川崎市に住んでいます。10/06～10/20 の日本付近の気流（すなわち風）を、矢印でベクトル表示してみました。同時にその風の温度分布も色分けしました。

このメールには、10/14～10/18 の 5 日分の図を添付しました。今回作図した風の図の気流は 1000hPa（上空、およそ 100m あたり）の高度です。

気流の速度は、図の下部に矢印で示しています。図ごとにスケールの数値が異なっているので長い矢印が、必ずしも、速度が大きいとは限りません。



作図の基となったデータは、気象の予報や環境分野等の研究のため、大学や研究所などでよく使われているものです。実際の観測値ではありません。再解析値（計算値）です。

観測できない空間の場所であっても気象の物理量（気圧、温度、風向、風速、高度等）が計算により求められています。

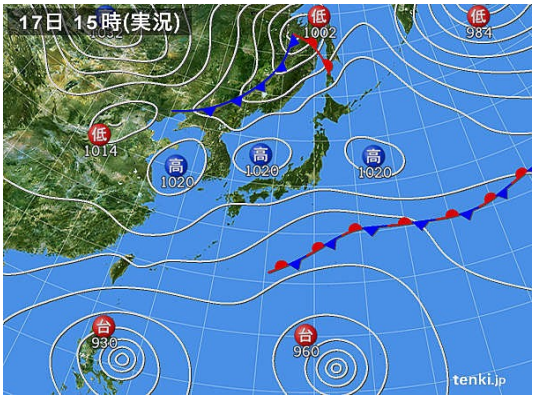
（添付図の数値データは京都大学のＨＰからの引用です。）

8-4. 地図と気象図

風の図をみると日本海付近の高圧部からの吹き出しの風があります、14 日に放蝶した日の図です、そこから与那国島(南西)の方向へ風のベクトルがあるのが見えます。次に気象図を見て下さい。これは再捕獲された１７日の気圧配置です。フィリピン付近に台風が見え

ます。昨年２つ玉の巨大な台風が発生して中国で大きな被害が起きたのを記憶にあると思います。この台風に対する引き込みの風に乗って移動したものと思われます。

↑　与那国島の位置図　出典：google



→　気象図　（出典：[4]）

8-5. 飛び立つきっかけ？

この投稿は愛知県の方がマーキング活動をされている場面で遭遇されたアサギマダラの行動について推測されたものですが、野母崎の放蝶を与那国島再捕獲と時期が同じなので、もしかするとアサギマダラが移動するタイミングを目撃したものかも知れません。

以下愛知県田原市の星野氏から投稿メールです。

[asagi:027183] アサギマダラのとても興味深い行動

星野です、こんばんは。
今年、印象に残ったアサギマダラの旅たちの瞬間をご紹介します。

場所：愛知県田原市高松町 赤羽根文化の森（尾村山)標高 189.3m
日時：2015 年 10 月 17 日、 午後 3 時頃

伊良湖岬までの渥美半島の途中にある赤羽根文化の森は遠州灘の海岸沿いにある標高 189.3m の小高い山です。
山頂には展望台があり、眼下には太平洋ロングビーチが広がっています。
ここでのアサギマダラの吸蜜植物はスズカアザミ、ヒヨドリバナがそれぞれ少しとコウヤボウキ、ツワブキ、コシロノセンダングサです。

ここ３～4 年は草刈りが頻繁に行われ、花より林内にいるアサギマダラをタオルチャッチで捕獲していましたが、今年は山頂に近い外周の歩道沿いにコシロノセンダングサが残っていた為、多くのアサギマダラが吸蜜に来ていました。

午後 3 時頃だったと思います、自分の標識済みのアサギマダラ１０数頭がコシロノセンダングサに止まっているところに 1 頭のアサギマダラが近くの 3 頭に次々に旅立ちを促すかのように体当たりするような姿が見られました。
その瞬間、4 頭のアサギマダラは落ち着きがなくなり、上下に弾みながら南西方向の海上に向かって飛び立って行くのを目視しました。

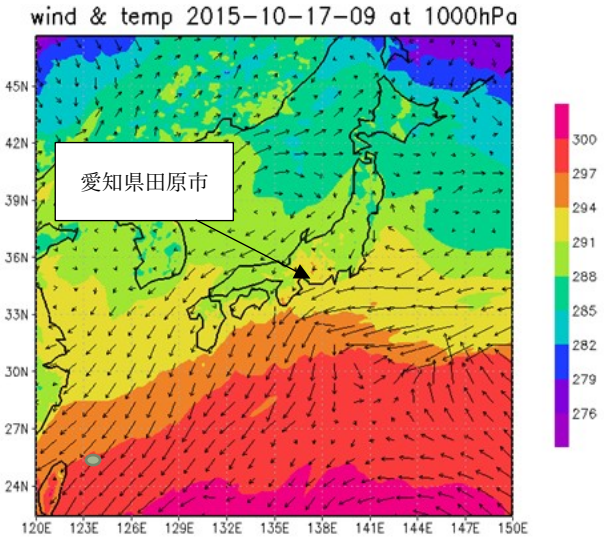
一瞬の出来事でしたのでカメラに写すことも出来ませんでした。その光景が時々、今も私の脳裏に浮かんできます。
以上です。

星野 京子

南下 1 号琵琶湖 7.31⇒広島 8.23

この投稿の情景が物語るのは南に向かう良い風を感知した蝶が仲間を誘って飛び出したと投稿者は推測しておられます。

では実際はどうでしょうか。
次ページに飛び立つ 10 月 17 日の風の図です、長崎の蝶が与那国島に到達した日と同じ日ですね、とすれば推測ではないように思われます。（風の図作成：佐藤氏）



8-6. アサギマダラは風に乗る、まとめ

以上８-１から８-５の事例から以下の事が分かるようです。

(1)　アサギマダラの移動については高気圧と低気圧の風を利用して移動している。

(2)　日本海の高気圧から吹き出した冷たい風に乗って移動する。

(3)　南に引き込みの低気圧があれば移動が速い

今回の例は、黄海及び玄界灘に高気圧があり、長崎県野母崎から飛んだ標識蝶がその吹き出しの風に乗り、同時期に沖縄南方海上に発生した二つ玉の台風に引き込む風に乗り1,110km を三日という短期間で移動した。

北上の場合は逆の気圧配置の風を利用して北上するのかも知れません。

参考文献

[1] 日本大百科全書, 小学館 (1997).

[2] 尾崎克久,味覚受容体遺伝子がむすぶ化合物と産卵行動,生命誌ジャーナル No.69, JT 生命誌研究館 (2011), http://www.brh.co.jp/seimeishi/journal/069/research_1.html

[3] http://tokada.blog.fc2.com/blog-entry-1116.html

[4] 日本気象協会 http://www.tenki.jp/past/2015/10/17/chart/

アサギマダラの飼育観察ノート

宗像アサギマダラの会　平松　秋子

1. はじめに

私がアサギマダラに興味を持ったのは、環境地域づくり研究所の前田秀敏先生から「渡りをする謎の蝶」というお話を聞いたからです。これまで昆虫の飼育の経験もなかったのですが、どんな蝶になるのかなと、安易な気持ちで幼虫の飼育を始めました。これは平成２８年２月 18 日から 3 月 26 日までの 37 日間の飼育記録です。

2. 飼育ステージ 1

2 月 18 日（木）　曇のち晴 9.7℃

宗像市ふれあいの森からキジョラン１株と幼虫２頭を持ち帰る。この時の幼虫の体長は不明。白っぽい葉の裏側を動き、食べている。キジョランを植木鉢に移植し、玄関外に置いた。後で行ってみると１匹になっていた。大きい方が行方不明に。何かに食べられたのかも知れない。その後、昼間は玄関の外に、夜は玄関の中に入れた（後で移動しないほうが良いと聞いた）。残った幼虫を「空（そら）」と名付けた。

2 月 26 日（金）曇のち晴 9.7℃

体長 14mm

2 月 28 日（日）晴 4.1℃

食べないで葉の裏の葉脈の上でじっとしている。眠りに入る前か。

3 月 1 日（火）曇のち晴 3.5℃

体長 17mm

3 月 2 日（水）晴 6.4℃

体長 18mm

3 月4 日（金）雨のち曇 14.0℃

朝、玄関内から出し、軒下に置いたキジョランは雨にぬれて生き生きとしている。幼虫も丸くなった頭を上げて元気そう。測定用の定規を当てると、また葉に頭をくっつけてしまった。

16 時27分

脱皮していた。

18 時に見たとき殻はなくなっていた(後で聞いたら自分で食べるみたい)。眠りから覚めた姿は丸い。脱皮してすぐの触角は丸く、後ろに曲がり、時間をかけてまっすぐになっていく。

3 月22 日（火）晴 9.4℃

葉を食べ尽くし、茎を伝い上る。体長３８mm 。

食べる葉が無くなってしまった。

3 月 23 日（水）晴 11.5℃

城山からキジョランを１株とってきた。よく探さなければ見つからない。少ないということか？（城山は少ないからとってはいけないそうだ）

3 月 24 日（木）曇のち晴 9.3℃

夕方見ると「空」の姿が見当らない。移動時は糸を出して行動するので糸を伝いながら帰って来るというので待つことにした。

3 月 26 日（土）晴のち曇 8.2℃

前田先生へ「いない」と連絡をする。とうとう帰ってこなかった。後で「鳥に食べられた可能性もある」と聞く。

3. 飼育ステージ 2

3 月 31 日（木）曇のち雨 13.2℃

朝８時半、ふれあいの森から幼虫２匹を連れて帰り観察を始める。置き場所は玄関ドアの内側にする。名前は「でか」と「ちび」とした。下の画像の左側が「でか」、右側が「ちび」の様子である。幼虫には鮮やかな色と白みがかった色の個体がある。写真では分かりにくい。

「でか」体長３４ミリ

「ちび」体長１７mm

4 月2 日（土）曇16.7℃

体の色が黄緑一色になり頭を下にして 下から上の葉に上り盛んに食べている。丸くなり、ぶら下がっているのが「でか」（前蛹）

写真右　前蛹になった「でか」

4 月4 日（月）雨のち曇14.3℃

「でか」は、メノウの勾玉のような緑一色の蛹になった。黒い点がはっきり見える。これは寄生虫が中に入っている。

「ちび」は 動き廻ってよく食べる

4 月8 日（金）曇のち晴れ14.2℃

2 頭が急接近した。「ちび」は食欲旺盛で、蛹になった「でか」に近づいて行った。

4 月9 日（土）曇のち晴れ15.4℃

「でか」は落下したので、糸で吊す

「ちび」は茎だけ残して葉を食べてしまう

4 月10 日（日）曇14.6℃

蛹は薄茶色で羽根も見えるが・・・？

「ちび」の動きは止まり、夕方には前蛹になった。

4 月14 日（木）曇のち晴16.5℃

「でか」には寄生蜂がいるようで死んでしまった。「でか」の観察は終りとする。

「ちび」は蛹になったが元気そう

4. 飼育ステージ 3

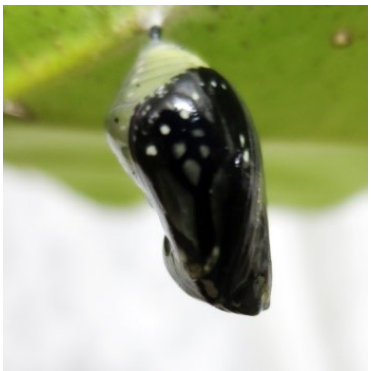
4 月27 日（水）雨 気温17.5℃

飼育ステージ２に引き続き「ちび」の観察を続ける。前蛹となってから 17 日目。「ちび」の羽化が近づいているようなので、室内に移した。出窓のカーテンの内側である。蛹の表面には金色の４つの模様と５つの黒点がはっきり見える。

5 月1 日（日）晴のち曇 17.6℃

室内の温度は24℃あり暖かい。

11時48分



20時43分　羽化直前で見る間に黒くなっていく

5 月2 日（火）曇19.3℃

朝 6 時 46 分に見たら抜け殻に
つかまっていた。

早朝に羽化したみたいだ。
後翅に性標がなく、♀である。
羽化の瞬間を見ることができなかった。

8時５０分

我が家で誕生したアサギマダラは羽を大きく広げてレースのカーテンへ移る。アサギ色の羽根がきれい。

１９時７分

紫蘭を窓辺に置くが吸蜜しない

5 月3 日（火）18;30

前田先生がスナビキソウとアザミと一緒に河東コミセンで羽化したオスを連れてこられた。名前がなかったので、「ごん」にした。

5 月6 日（金）

9:34　2 匹はスナビキソウに止まる。「ゴン」は羽ばたき、「チビ」近づくが相手にされない。

5月7日（土）夜

「ちび」の姿が見えない（この後、行方不明のまま）

その後、「ゴン」の飼育観察を続け、さつき松原海岸でマーキングをして放蝶する予定。

5 月14 日（土）曇 19.0℃

シロツメグサやアザミには止まらない。ポカリスウェットのしみ込んだ白いペーパータオルに止まる。この光景はよく見られた。

5月18 日（水）快晴 15.9℃

7 時33 分 さつき松原海岸で放蝶。「HUKM S18 HAA-1」のマーキングをして掌に載せると、元気よく飛び立っていった。室内で飼育したので、羽が弱っていないかと心配したが大丈夫。

立会人は前田氏と安松氏。

5. おわりに

アサギマダラを幼虫から蝶になるまでを観察し記録した。アサギ色をした蝶は鱗粉も少なくて大変きれいだ。部屋の中で一緒にいるとわくわくする。多数で乱舞する光景は夢のようで、多くの人を魅了するに違いない。

マーキングにより、渡りの謎が解明されると思われる。現在、ネットワークを通じて情報の交換も始まっている。

アサギマダラの幼虫の食草 キジョランについて

宗像植物友の会　黒川　康子

1. はじめに

近年アサギマダラの幼虫の食草としての認知度が上がったキジョラン[注1] ですが、ではどういう植物かというと具体的には余り知られてはいないのではないでしょうか。食草として見ていた植物から、キジョランそのものに興味を持って頂ければという思いで以下に紹介します。

2. 草姿 つる植物なのに立っている？

キジョランは　ガガイモ科[注2] キジョラン属の　常緑照葉樹林内に生育する常緑多年生のつる草で、樹木に巻き付いて高いところまで伸びます。

宗像の山の登山道では、濃緑色のハート型に近い大きさ 10 センチほどの葉を５～６枚付けた、高さ 30 ㎝内外のものがよく見られます（図１、図２）　。でもつる草のはずなのに、みんな真っ直ぐ立っていて、まるで樹木の幼木のような姿です。灰白色の茎も丈夫で木本に見えます。

注１　キジョラン *Marsdenia Tomentosa* Morr. et Decne　関東以西～琉球諸島～朝鮮南部に分布。キジョラン属は暖帯～亜熱帯に約 70 種（参考文献[1]）。日本にはトカラ列島以南のソメモノカズラと沖縄県のタイワンキジョランと合わせて３種。

注 2　ガガイモ科は APG 新分類体系ではキョウチクトウ科に変更されていますが、現在市中にある図鑑類の多くがまだ旧分類のままなのでそれに則っています

図１　2016-7-21　　許斐山

図２　2016-11-3　　許斐山

葉質は厚く少し光沢があり、形は大体図１のようなもので、縁にギザギザ（鋸歯）はありません。表は無毛又は殆ど毛がないと図鑑類に書いてありますが、短い寝た毛が散生しています。新芽は白くなるほど毛に覆われていますので、それが残っているのかもしれません。長さや丸さには変化がありますが、他に似たものがなく、間違えることはありません。その葉に丸い穴が開いていたら、ひっくり返して裏を見た人も多いことと思います。

芽生えて何年かはこういう姿をしています。同じようなことがガガイモ科のシタキソウ（図３）やキョウチクトウ科のサカキカズラ（図４）にも見られます。　シタキソウは沿海の山林内にはえる常緑多年生のつる草で、湯川林道で多く見ることができます。サカキカズラはキジョランと同じようなところにはえる常緑つる性木本です。

図３　シタキソウ　2016-11-17　湯川林道

図４　サカキカズラ　2016-11-17　　許斐山

何かのきっかけで茎の先端からつるが伸び出します（図５、図６、図７）。経年や葉の枚数、あるいは巻き付くものが近くにあるなど考えられますが、それが何かは今のところ私には分からず、興味を持って見ています。

図５　キジョラン　2016-10-15　許斐山

図６　シタキソウ　　2016-11-17　湯川林道

図７　サカキカズラ　2016-7-21　許斐山

登山道わきの少し藪になっているところでは、つるが他の植物に巻き付き、さらに自分自身にも行きつ戻りつしながら巻きついている様子を見ることができます（図８）。

図 8　2016-10-15　　許斐山

このくらいで終わりではありません。つるはグングン伸びて日当たりの良いところまで上がっていきます。こうしてやっと花を咲かせることができます（図 9、図 10）。

図 9　2016-11-3　　許斐山山頂直下

図 10　2016-8-12　　湯川林道

3. 花　高嶺の花

前述のように若い株は多いのですが、花を付けるまでに高いところまで伸びたのは余り見られません。樹木の上のほうなので気づかないこともあるでしょう。また気づいても高くて花まで遠く（図 10 参照）、しかも黄白色の 4 ～ 5 ミリの小さな花の集まりです（図 11、図 12）ので、よく見えません。

図 11　葉腋の花序　2016-8-12　湯川林道

図 12　花　2016-7-12　大平村にて採取

鐘形の少し厚ぼったい花冠は五中裂し、内側（喉部）に長い毛が生えています。中央の五角形は副花冠（スイセンの内側にある黄色いものと同じ）で真ん中にずい柱（雌しべとおしべが合着したもの）が見えます。花期は 7 月から 10 月ごろまでと幅があります。

ガガイモ科の花は小さくて目立たないものが多いですが、拡大すると美しくて興味深い姿をしています（図 13、図 14、図 15）。宗像では、ガガイモ、オオカモメヅル、コカモメヅル、コイケマ、シタキソウ、フナバラソウそしてキジョランの 7 種があります。

図 13　ガガイモ
2016-9-25　朝野

図 14　オオカモメヅル
2016-9-14　高隈山麓（鹿児島県）

図 15　イケマ
2016-8-11　白鳥山（熊本県）

4. 果実　袋果（たいか）

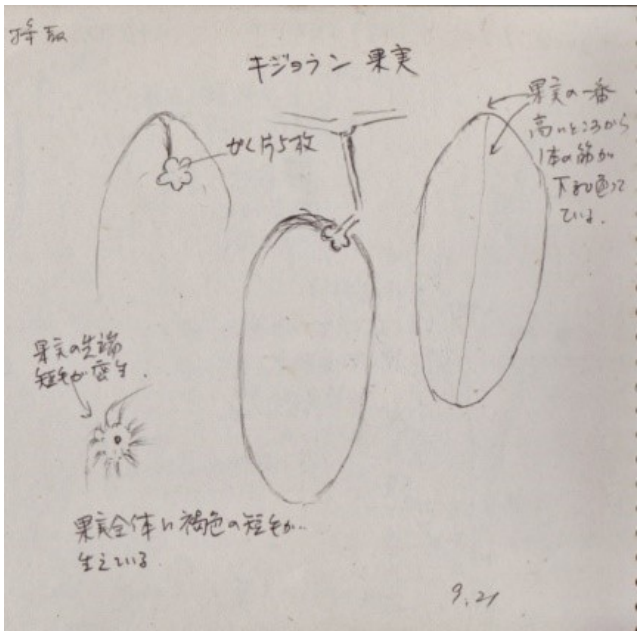
花の数は多く、花期も長いのですが、一株に実る果実は少なく滅多に見ることができません（図 16、図 17）。成熟も遅く、翌年の 12 月ごろからやっと種子が散布されます（図 18）。

図 16　2016-11-17　　湯川林道
花（図 11）後 3 ヶ月

図 17　2007-9-15　古賀市（碓井美和子氏提供）
花と前年結実した果実が同時期に見られる

図 18　2015-1-13　　湯川林道
果実が裂開して白い絹毛(種髪)が目立つ

10 センチ位の果実には果柄の付け根から先端まで一本の筋が付いています（図 19 参照）。成熟するとそこが裂けて船底のような形になり、中から白い絹毛のついた種子が飛散していきます（図 18）。このような裂けかたをする果実を袋果(タイカ)といいます。よく見るアケビ（アケビ科）を思い浮かべたら、分かりやすいと思います。



割ると青臭い強い匂い。
白い液も出て来た。
←果実に線が見える

図 19
2008-9-21　熊本・段塔で採取したものを写生

袋果は宗像で身近なものでは、ガガイモ科、キョウチクトウ科、キンポウゲ科のサラシナショウマ、ヒメウズなどが挙げられます。

以下４種それぞれ特徴のある姿をしています。

ガガイモ科・どちらも多年生のつる草

ガガイモ　2016-11-13　朝野

コイケマ　2016-7-15　さつき松原

キョウチクトウ科　・どちらもつる性木本

テイカカズラ　2016-7-21　許斐山

サカキカズラ　2016-7-6　　昼掛

↓

２個が裂開しているが、まるで
１個が二つに割れているように見える

裂開したテイカカズラ　　2016-11-3　　許斐山

5. 種髪（しゅはつ）を付けた種子 風に漂う

袋果の中では種子が瓦状に重なり合っています（図 20）。ガガイモやコイケマ、キョウチクトウ科のサカキカズラも同じように内蔵されています（図 21）が、細長いテイカカズラは種子を上方に向けて一列に並んでいます。

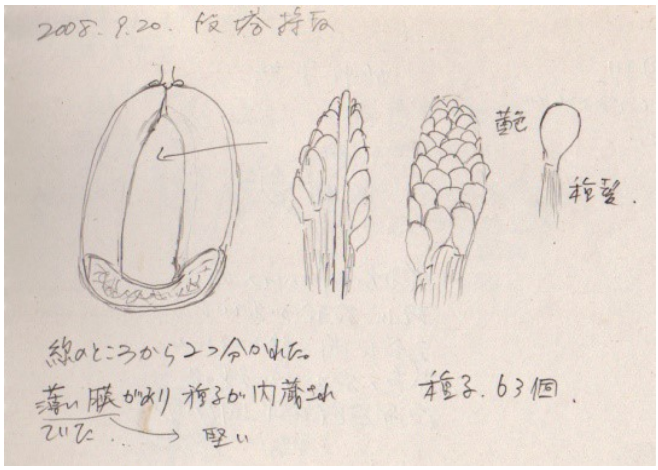


図 20　キジョラン種子スケッチ

図 21　サカキカズラ　2016-10-26

冬、宗像の山では白く輝く絹毛を広げたキジョランの種子が、フワリフワリと漂っています。地面や葉の上に落ちているものを触ろうとすると、フワリと舞い上がるくらい軽いものです。この絹毛はミクロン単位の繊維からできていて、種子の一部が変化したものだそうで（参考文献[2]）、種髪といいます。種子の本体は扁平で、種髪のついた部分が僅かに突き出ている 1.5 センチ内外の楕円形をしています（図 20）。残念ながら写真がありませんので、同じように山の中を漂うよく似た種子を参考に、図 20 のスケッチと合わせて想像して下さい。

図 22　シタキソウ種子
2016-11-1　撮影

図 23　サカキカズラ種子
2016-11-1 撮影

図 24　テイカカズラ種子
2016-11-7　撮影

＊どれも若い果実から取り出したものなので、種子本体の色は成熟するともう少し黒っぽくなる。

キジョランに一番似ているのはシタキソウ（図 22）です。私にはまだ区別がつかず、植物本体を見て確認しています。サカキカズラは種子の上部が細長く突き出ていて、種髪の付け根も長めにくっついているので、手に取って見れば区別出来ます（図 21、図 23）。テイカカズラは種子本体が細長く（図 24）、人里にも生育するので、ほかの種に比べ見る機会が多く区別は容易です。

キジョランは鬼女蘭と書き、絹毛の様子から白髪を振り乱した鬼女に例えられています。私は、弧を描いた絹毛が美しいと思っているのですが、風で乱れたり、図 18 の様子などから衝撃的で想像が膨らむ名前が付いたのでしょうか。蘭の由来については触れてあるものが見当たらず、目下調べ中です。

絹毛を広げて風に飛ぶ植物はキク科のタンポポなどにもあります。この絹毛は冠毛といいガクが変化したもので、種子に見えるのは果皮の薄い果実で瘦果といいます（図 25、図 26）。キンポウゲ科のセンニンソウも、瘦果のついた花柱が伸びて白い羽毛状の毛ができます（図 27）。

図 25　タンポポ　2016-11-13

図 26　ベニバナボロギク　2016-11-13

図 27　センニンソウ　2016-11-13

6. 有毒植物　　食痕の丸い穴

キジョランの茎や葉を傷つけると、切れた葉脈から真っ白な液体が出てきます。葉脈が大きいほど溢れ出る量は多くなります（図 28）。

図 28　切ると、見る間に牛乳のように白くてとろりとした液体が出てきた　　2016-10-20　　湯川林道

自ら動けない植物は昆虫などに食べられないための何らかの防御物質を持っていますが、昆虫もまた対抗策を持っています。キジョランの白い液体はアルカロイド系の強い毒性があります。アサギマダラの幼虫は葉裏側から葉の組織を切断していきます。切り跡が円形に繋がると内側には有毒物質は供給されません（図 29）。

その後内側の葉を食べていきます。

この行動は丸山宗利著「昆虫はすごい」（参考文献[3]）と小松　貴著「裏山の奇人」（参考文献[4]）に記載がありました。このことを知った後は円形のかみ跡を注意して見つけているのですが、内側を食べて穴になってしまうからでしょうか、なかなか見つかりません。

幼虫が葉裏を丸く傷つけている。この状態を表から見ると、
薄い緑色の輪になっているのがわる。
食痕の周りには行き場を失った白い液がたくさん付いている。

図 29　アサギマダラの食痕
2015-1-18　城山登山道　　西田迪雄氏提供

漢名は、牛嬭菜（和訳・牛乳菜）と言われ（参考文献[5]）、白い液を牛乳に例えてあるようです。全草有毒で食べられないのですが、中国や台湾では別名も多く、また漢方薬として使われていることから、日本と異なり身近な植物のように思います。

7. 終わりに

本文を書くために何度も湯川林道や許斐山などに出かけキジョランの観察をしたり、必要な資料や写真を集めたりしました。そこで初めて知ったことが色々ありました。

開花の翌年に果実が大きくなって成熟すること、花の数の割には果実が非常に少ないこと、種髪は種子の一部が変化したものであること、学名は「密毛のある」というように（参考文献[6]）、見た目以上に植物体に毛があることなど。花を手に取って見たのも初めてでした。

分からないことも出て来ました。一番気になったのが、種子散布後その株がどうなるのかです。

2015 年 1 月の図 18 は 2016 年 7 月には跡形もなく消えていました。また、花の付いた株を 3 株見つけましたが、そのどれにも果実はついていませんでした。図 17 は同じ株であるのかは未確認でした。同じガガイモ科のシタキソウも同様な経験があります。

多年生草本は 3 年以上の寿命があるものをいいます。地上部は毎年枯れても地下部は生きているもの、地上部は 2 ～ 3 年で交代するが地下部はずっと生き続けるもの、地上部は毎年交代し、地下部は 3 年ほどで交代するものなど、植物種によって生活史はさまざまです。また一回繁殖型という、開花結実のあとその個体は枯れてしまう一年草や二年草と同じ生活形の多年草があるそうです（参考文献[7]）。もしかしたらこれかもしれないと考えていますが、今咲いている株で確かめる必要があります。結果は早くとも 2018 年に出ることになりそうです。つるが伸びるきっかけも、キジョランの蘭の意味も私には分からないままです。

今後山歩きしながらこれらを解明する楽しみが増えました。

謝辞

本文を書くにあたり多くの方にご協力頂きました。

むなかた蝶類研究会の西田迪雄氏には、アサギマダラの幼虫がキジョランに傷をつけている貴重な画像の提供と本文の書き方について教えて頂きました。碓井美和子氏には滅多に出会わないキジョランの果実の画像を提供頂きました。9年前のもので探すのが大変だったと思います。宗像植物友の会の阿部敏子氏にはシタキソウの種子が入った袋果を提供して頂きました。同じく藤井えり子氏にはキジョランの漢名「牛嬭菜」の読み方や意味、台湾のキジョラン属について教えて頂きました。15 年来の植物観察グループ「のみちの会」の皆さんには山歩きに同行してもらい、楽しく観察することができました。

皆様には本当にお世話になり、感謝申し上げますと共に厚く御礼申し上げます。

参考文献：

[1] 日本の野生植物　草本Ⅲ，平凡社 (1985).
[2] 多田多恵子：種子たちの知恵，NHK 出版 (2008).
[3] 丸山宗利：昆虫はすごい，光文社新書 (2014).
[4] 小松　貴：裏山の奇人，東海大学出版部 (2014).
[5] 飯沼慾斎：草木図説，国立国会図書館デジタルコレクション.
[6] 長田武正：検索入門　野草図鑑　つる植物の巻，保育社 (1984) .
[7] 岩瀬　徹・大野啓一：写真で見る植物用語，全国農村教育協会 (2004).

地元学でさぐる池野の魅力
コミュニティまちづくり計画での実践報告

池野地区コミュニティ運営協議会まちづくり計画
「池野探索」活動委員会 地元学班
船津 建

１．コミュニティ単位での地元学調査実施に至る経緯

１．１ 地元学との関わり

1990 年代に入って「地方の時代」、「まちづくり」といった言葉をしきりに耳にするようになった。しかし、往々にしてそれは掛け声倒れになり、実際に特色ある地域づくりに成功した「まち」はごくわずかであった。そんななかで水俣市の吉本哲郎さんが提唱された「地元学」が新たな方法論として脚光を浴びるようになった。その具体的な内容や実践についてはすでにさまざまな報告がなされているのでここでは触れず、筆者がこれまで地元学とどのように関わってきたかについてのみ簡単に振り返ってみたい。

宗像市は比較的早い時期から地元学に取り組んできた。2003 年には鐘崎地区において「筑前玄海魚まつり」が開催されたが、筆者はまつりの参加者として地元学調査を実地に見聞した。また 2006 年には名残地区において地元学調査が行われたが、これにも一市民として参加した。ディジタルカメラで撮影した写真を模造紙に貼り付け、多色のマーカーで説明を書き込んでいくというディジタル＋アナログの整理手法が新鮮で、新たな可能性を実感することができた。

2009 年には当時勤務していた福岡教育大学の学生たちを引率して吉本哲郎氏のお宅に合宿させていただいた。ちょうどその頃出版されたばかりの岩波ジュニア新書版『地元学をはじめよう』[1]にある通りの里山に位置するお宅で、お母様と奥様の心のこもった手料理に舌鼓を打ちながら、直接地元学のこころを説いていただくという幸運に恵まれた。吉本氏は 2004 年に旧大島村での地元学に招かれた経験から、宗像での地元学で心がけるべき点をいくつか示唆してくださった。その当時は筆者自身あまりピンとこなかったのだが、氏が古くからの信仰の跡の意義について強調されたのが記憶に残っている。

また吉本氏と並んで地元学の東の代表的存在とも言うべき結城登美雄氏が JA むなかた主催の講演会で自らの活動を紹介され、興味深く拝聴した。食品や道具が満載された結城氏の本も「あるもの探し」のお手本のような貴重な資料だった。

このようにして地元学について個人的に学びながら、一方で勤務先の大学においてその手法を取り入れた「総合学習」の授業方法開発に取り組んだ。2005 年から3ヶ年かけて「元気になる授業の創り方」と題するプロジェクトを立ち上げ、多様な専攻分野の学生と教員が協働する形で総合的な学習の可能性を追求した。その過程で、地元学と総合学習は非常に相性がいい、基本理念が同一であるとの認識に達した。プロジェクト最終年(2007)には、筆者がかねてより漁村留学制度支援のため関わっていた宗像市地島をフィールドとして、「あるもの探し」「ものづくり」「食の文化祭」の三本立てで総合的な学習の実習を行った[2]。地島は過疎化の波にさらされてはいるが、島の住民自らが漁村留学をはじめ外からの風を積極的に受けとめながら活性化策（宗像市元気な島づくり事業）に取り組んでいる地域である。そのような共同体で地元学を実践できたのは筆者にとって貴重な体験となった。

１．２　池野のまちづくり計画策定と地元学

平成 19 年（2007）年度、計 6 回にわたって「池野地区まちづくりワークショップ」が開かれ、その年度末に『池野地区まちづくり計画』（原案）が作成された。さらに平成 20 年度に入って最終的に『池野地区まちづくり計画』が策定された。筆者も住民としてそのワークショップに参加した。その計画において「文化を育み、伝統を語りつぐまち」という将来像を追求する活動のひとつとして、「地元学による地域のあるもの探し」が位置づけられた。そしてこの活動は3年以内に開始することとされた。その後の3年間、まず「地元学とは何か」について学習会を持った。吉本哲郎氏の『地元学をはじめよう』及び『風に聞け、土に着け～風と土の地元学』[3]をテキストに、地元学の手法を学ぶとともに、池野における地元学の方向性を議論した。地元学のあるもの探しの趣旨や方法論には実行委員のメンバーに異論はなかったが、「得られた情報を地域で共有し今後のまちづくりに活かす方策を話し合う」という部分に関しては意見がまとまらなかった。自分の地域についてより深く知り、その情報を共有するのはいいとして、「今後のまちづくりに活かす方策」まではとても責任が持てないというのが率直な反応だった。司会役を務めていた筆者自身も、水俣の共同体再生をめざして始まった地元学の活用策をそのまま池野地域に当てはめるのは無理があると判断し、とりあえずはあるもの探しと情報の共有にとどめることで合意を得ることに努めた。そうしてみんなの気持ちが少し軽くなったところでさっそく「まちづくり計画実行委員会地元学班」は活動を開始し、主に史跡を中心に数回にわたって下調べを重ねた。まちづくり計画立案から3年目の平成 23 年度、「孔大寺山歴史探訪」と題する第一回目の地元学調査を行った。それから今年 28 年度にかけて合計7回の地元学ワークショップを開催してきた。

１．３　池野の地元学の特徴

宗像市内どこのコミュニティ運営協議会でもワークショップ形式で「まちづくり計画」が策定されたようだが、すんなりと実施に移すことのできたところは比較的少数だったと聞く。池野の場合は策定後5年くらい経ったところでみても、計画はだいたい順調に実施されつつあった。地元学も初めての取り組みにもかかわらずほぼ円滑に運んでいる。その要因として次のような点が挙げられるだろう。

- まちづくり計画の策定に携わったメンバーの多くが、その後も役員や実行委員として残ったために継続性を保つことができた。
- いろいろな活動を進めるにあたって、取りかかりやすいものから順に年次計画を立てて実施したために無理がなかった。

池野の地元学の特徴としては次のような点が挙げられる。

- 地元学は初めての取り組みなので十分な準備期間をおき、関心のある人々が自主参加する形式を取ったために、せざるをえない義務という感覚で臨むことが少なかった。
- 池野の場合、地元学を実施するメンバーの柱となる「風と土」のバランスがもともとよく取れている。すなわち、先祖代々池野に住む人たちと、池野の風土に魅かれて移り住んだ人のバランスがよい。さらに詳しく言えば、土の中にも2種類あって、生まれてからずっと池野で暮らしてきた人と、一度外に出てＵターンしてきた人がいる。また、風の中にも2種類あって、定住を目指し移り住んできた人と、よそに住んでいるが池野に魅かれて訪ねてくる人があり、それぞれがバランスよく活動に参加しているということである。
- 地元学班のメンバーは多少の入れ替わりはあるものの、ほぼ 10 人程度が核となって継続的に活動に取り組んでいる。
- 歴史学や民俗学の専門家は一人もいないが、みんなそれぞれ学びつつ素人として探索と聞き取りを楽しむことを主眼に調査を続けている。
- 毎回の調査結果をパネルにまとめるが、同時に後日活字化することで情報の共有化の可能性が広がった。

このパネル作成については、これまでの経験から次のようなことが指摘できる。

- パネルの長所
  ① みんなで即日共同作業してまとめる楽しさ
  ② 手書きの味わい
  ③ 多様な視点が盛り込める
  ④ 文化まつりなどでの展示に向いている
- パネルの短所
  ① 短時間でまとめるため、記述が網羅的で浅いものになりがち
  ② 文献調査、聞き取り、現地再調査の必要が生じる
  ③ 人の目に触れる機会が限られる

したがってパネルの長所を活かしながら短所を補う方法として、調べた内容を活字化することには意義がある。特に現在は写真入りの文章が作成できるうえに、プリンターの性能が向上し手軽な製本器具も整っているため、

印刷所に依頼せずとも簡単に冊子にすることができる。池野では毎年その年度の実践を加えて増補版を作成し、文化まつりなどで住民に実費で頒布している。

２．地元学実践例の紹介

２．１　これまでに行なってきたこと

第1回から第4回までの地元学調査の概要は以下のとおりである。

第1回：孔大寺山（こだいじやま）歴史探訪―平成 24 年 3 月 5 日　9:00～17:00　参加者：21 名

青少年育成部会とタイアップしたため小学生の参加も多かった。予備調査に基づいて3グループに分け、参道、本殿、頂上の様子をそれぞれ調べることにした。本殿までの石段を正確に数え、従来 810 段と言われてきたのが実は 860 段であることを突き止めたり、頂上付近に放射状に8つもの洞窟のあることを発見するなど収穫が多かった。

第2回：田野史跡めぐり―平成 24 年 11 月 23 日　13:00～17:30　参加者 21 名

宗像市文化財係の白木英敏氏を迎え、一緒に回った。瀬戸古墳や鎧塚、依嶽神社など身近にありながらほとんどの人がこれまで訪れたことのない場所が多かった。特に鎧塚はこの近辺では珍しい宝篋院（ほうきょういん）塔で、白木氏の指摘で江戸時代の様式であることが判明した。

第3回：平家伝説の跡を訪ねて―平成 25 年 5 月 26 日　10:00～16:00　参加者 15 名

目玉は孔大寺山8合目あたりにある巨石「五位の石」で、『平家物語』巻八「太宰府落ち」の一場面に関連した伝説を秘める。他に平家の落人平信盛の笠塔婆、信盛の子孫ゆかりの金鉱跡などをめぐった。「五位の石」には後日、伝説を紹介する説明板を設置した。

第4回：池野の海辺を歩こう！―平成 25 年 10 月 20 日　13:30～17:30　参加者 21 名

池野は大部分が森林と田園だが、田野浜という白砂青松で名高い海辺も抱えている。田野浜を散策し漂着物を採取しながら、地元の方たちに松露の採れていた往時の思い出を語ってもらった。漂着物は石井忠先生に倣って分類し[4]、池野文化まつりで展示した。

以上の4回についてはその都度パネルにまとめたが、最初の3回は写真データの保管が不十分だったため活字化できなかったので、追って整理する予定である。今回の報告ではパネル作成の後で活字化も行なった第5、6回についてのみ以下の節で詳しく紹介する。

２．２　池野の石碑・石仏めぐり

池野には過去 2、30 年のうちに中小規模の新興団地が5、6個所できたとはいえ、ほぼ昔ながらの町並みや景観が保たれている。散策していると路傍のあちこちに素朴な石仏や石碑を見かける。その多くは2～3百年も前から同じ場所に立っているのだ。その意味で宗像市のなかでも珍しい地域のひとつではないだろうか。

かつてこの池野の史跡をつぶさに調べてマップを作製した方があった。地元釣山集落の永野千春さん（84 歳）だ。20 年ばかり前、池野公民館長をされている頃に作成されたもので、公民館の講座や史跡めぐりなどに活用されていたものだ。その貴重な資料に基づきながら、地元学班のメンバーは現地をあらかじめ下調べしておいてから参加者を募り「石碑・石仏めぐり」を催したのである。池野全体を回るのに全部で4回かかったが、①畑集落②田野地区5集落③椰野、上大王寺、下大王寺、竜王集落④笠松、木原、坂名、釣山集落のうち、今回は①、②について報告する。以下、文体は冊子の通り「です、ます」調とする。

池野の石碑・石仏を巡る１～畑（はた）集落
2014 年 10 月 19 日

池野地域はお地蔵さんをはじめとする石仏や、庚申碑、猿田彦大神（さるたひこおおかみ）の石碑などが数多く点在し、大半は今も地元の人の素朴な信心の対象で、花や食べ物が供えられています。これから数回かけてそれらを巡り、地元の人たちの話を聞きながらいずれはマップを作製する計画です。

第1回目は、遠賀郡との境に位置する畑（はた）集落を歩きました。秋晴れの 10 月 19 日（日）、14 名の参加者は、まず集落入口にある猿田彦大神の石碑と2体のお地蔵さんの前に立ちました。石碑の裏面には「嘉永 7 年 7 月吉日」と刻まれています。1854 年、今からちょうど 160 年前に建てられたものです。お地蔵さんの方は2体とも風化が激しく、姿もよく見えない状態ですが、今も花や果物が供えられています。

地蔵は舟形浮き彫り式で、右側のは右手に錫杖（しゃくじょう）を持っているのがかすかに見て取れます。この形式のものは延命地蔵で、冥界に行く者を救うとされたそうです。

猿田彦大神と地蔵の向かい側、狭い市道を挟んでタブの古木が立っています。いかにも御神木という風情の老木で、樹霊が宿っている感じがします。ときどき見知らぬ人がこの樹に惹かれて上って来て、写真を撮ったりスケッチをしたりするそうです。

20 年前はこの樹にもまだ勢いがあって、大枝が二本、形よく腕を広げていたのに、それも順に枯れ、今では年々小さくなっていくようで寂しいと、この樹の近くに住む2軒のお宅の方々が口をそろえて言っておられます。

タブの木の下の道を100メーターばかり上った道端に、赤い腹がけをしたお地蔵さんが2体あって、ここにもまたお供え物が絶えることがありません。

腹がけはもともと幼くして亡くなったわが子が、三途の川を渡るときに迷わないよう、お地蔵さまに導いてもらうために、生前身に着けていたものを、母親が地蔵に掛けて、わが子の匂いを知ってもらおうとしたものだそうで、その意味からすると、新しく縫って掛けるのはまったく無意味なことだと望月信成『地蔵菩薩』に書いてありました[5]。

最初の地蔵と二番目の地蔵のちょうど中間地点あたりに右のような道標が立っています。

裏面には大正 12 年参宮同行という文字とともに5名の名が刻まれています。一緒にお伊勢参りをした集落の仲間が寄進したものでしょう。現在の道が拡幅舗装されるとき旧道から移されたそうですが、今も三差路の隅に立っていて、「をんが道」と刻銘され、西側が赤間、東郷、田島、神湊、北側は以志はら(石原のこと)と書かれています。今から 91 年前に建てられたものです。

この道はまた、もっとはるか昔には「万葉道(まんにょうどう)」と呼ばれ、遠賀から垂水峠を越えて太宰府に到る最古の官道でもありました。背後に見える山は宗像最高峰の孔大寺山(こだいじやま、499m)です。

「をんが道」の道標から 150 メーターほど東に上った人家の隣に「庚申尊天」と書かれた自然形のかなり大きな石碑が立っています。ここも水やご飯などが欠かさずお供えしてあります。最初の猿田彦の碑が集落の入口なら、ここはちょうど中間点くらいにあたります。碑の裏を見ても、文字が刻まれているかどうかすら定かでなく、いつ頃建てられたものかまったく分かりませんが、江戸時代であることだけは確かでしょう。

「庚申尊天」の碑からさらに少し東に上ると左に曲がる道に出ます。それを 100 メーターばかり進むと突きあたりが変則四差路になっています。その辻にもまた「猿田彦大神」と太く力強い字を刻んだ長方形の石碑が木立の陰から顔を覗かせています。この碑のそばにタブの木はなく、代わりにヤマモモとスダジイの大木が碑を守るように立っています。こちらの方が最初の「猿田彦大神」碑よりも新しそうに見えますが、裏の文字が読みとれない、というか文字があるかどうかも定かでないので確かなことは分かりません。

今回は時間の関係で回れませんでしたが、畑集落にはあと2か所、猿田彦又は庚申塔があります。ひとつの小さな集落に5本もあるとは、この集落が昔はもっと人家も多かったことを伺わせます。地元学班の事前学習で調べたところでは、庚申塔はもちろん、猿田彦の碑も「庚申さま(庚申待)」と関係がありそうです。

そもそも『古事記』や『日本書紀』に登場するサルタヒコは、天孫降臨の道案内をする国つ神ですが、そのあまりに複雑多様な性格から謎の神と言われます。サロ（のちの新羅）系渡来人金工集団が創り、祀った神だとする説もあります[7]。また、畑（ハタ）という地名について、古代に冶金鋳造技術を持った新羅系渡来人秦氏（はたし）一族が鉱山を探して四塚連山を歩き、修験道を残したこととの関連も言われています[7]。

『玄海町誌』によれば旧玄海町地域には猿田彦を祀った神社が六つもあります。海人族とのつながりなども興味深いのですが、今回は庚申信仰との関係だけ見ることにします。

近代以前の月日や年号は、十干十二支にもとづき、甲子（きのえね）から始まり六十で一巡するものでした。したがって庚申（かのえさる）も 60 日あるいは 60 年に一度巡ってきます。庚申の日には天帝が人の悪事を裁くので、寝ずの番をして自分の悪事を天帝に報告させまいとする考えが広まり、近所や仲間内で集まり一緒に徹夜する習慣が始まったのです。それが庚申待ちで、江戸時代に最も盛んだったそうです。

祀るのは仏教系の青面金剛（しょうめんこんごう）だったり、神道系の猿田彦だったりまちまちですが、猿田彦の方は元禄時代以降に祀られるようになったとのことです。そしてその碑が建てられたのは江戸時代末期が最盛期だったそうで、今回最初に見た猿田彦の碑も確かに江戸時代末期のものでした。

庚申信仰は明治に入ると政府によって淫祀とされ、急速に衰退しますが、宗教的な性格は薄れても、ムラの親睦・連帯をはかる行事として戦後まで生き残りました。畑集落でも、40 年くらい前まではまだ家周りで実施していたそうです。上の絵は畑の野田という隣組の庚申さまで使われていた掛軸で、明らかに猿田彦大神の図です。かなり古いもので、何度も修復した跡があります。庚申待ちはすたれましたが、この掛軸は「宮座」で現役を務めています。猿田彦は田の神の性格もあるので、毎年 10 月の第二日曜日に収穫感謝の祭「宮座」が開かれます。非農家の家も2軒ありますが、今は隣組親睦の色合いも強く、全 12 軒が集まって飲食しながら楽しく談笑します。それをこの猿田彦大神が上座からほほえましそうに見下ろしておられるのです。

石原入口の猿田彦石碑から「をんが道」に抜ける道を 50 メーター下った路傍に、お地蔵さんがひとつ大きな石に乗っかって立っています。舟形浮彫の古いものですが風化が激しく顔もよく見えません。

石原の林の中は石仏や木彫りの仏さまの宝庫です。猿田彦の石碑から集落に入り、国道 495 号線に抜ける少し手前を左の木立に入るとすぐに、まず見えてくるのがずらりと居並ぶ十三仏です。右から不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、弥勒菩薩、薬師如来、観世音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来、阿閦（あしゅく）如来、大日如来、虚空蔵菩薩です。

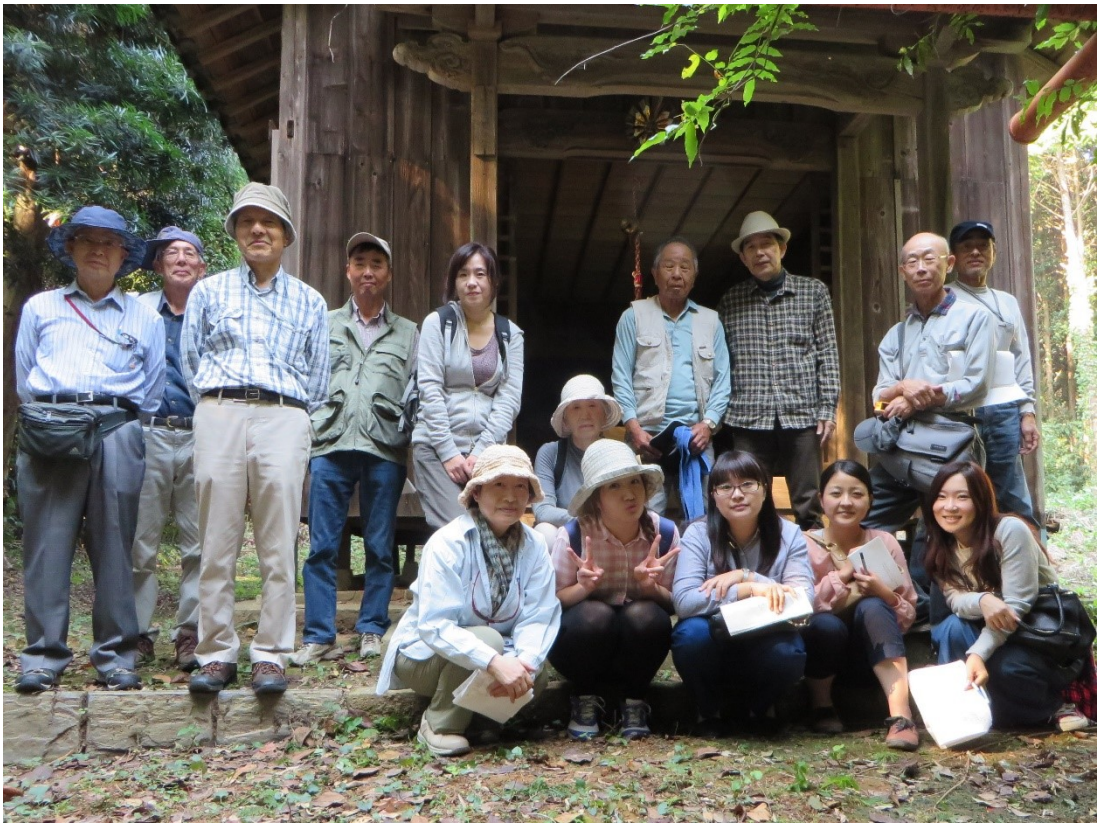
しばし仏像を眺めていた地元参加者のひとり（67 歳）が、「あ、うち方のばあさんだ！」と奉献者のなかに祖母の名を見つけて驚きの声をあげました。

十三仏の向かい側に小さなお堂があります。その入口には「宗像東部霊場 63 番札所毘沙門天」と看板が掲げられています。地元の長老の案内でお堂のなかに入ってみました。なかは十数人が座れる広さで、2 年に一度「千人参り」といって、宗像の霊場巡りをする人たちが仏像を拝んでからひと休みするための場所だそうです。西部霊場と1年交代で回るのですが、千人はもちろん大げさで、実際には巡礼者の数は年々減り、今は40人くらいがお参りに来られるそうです。昔は集落としておもてなししていたけれど、今は有志でしているとのことです。

さて肝心の毘沙門天はと、お堂正面に目を向けると、覆いがしてあって簡単には覗けません。地元長老の許しを得てなかを撮影させてもらいました。左の写真が御本尊ですが、どう見ても四天王の随一である毘沙門天のいかめしさとはほど遠いかわいらしいお顔です。長老もこの場所のことは「観音様」と呼び、この仏像は腕がもげて額の飾りも盗まれたのだと説明してくださいました。神仏習合の時代に孔大寺権現にあった本地仏は千手観音で、明治初年の神仏分離令で畑集落石原に観音堂が建てられたと『玄海町誌』に書かれています。町教育委員会の調査よると文化13年(1816)に奉納されたと記されているとのことです[9]。しかしこの仏像の頭部はどうみても千手観音には見えません。宗像六社と呼ばれる神社の内、他の五社(宗像三社、織幡神社、許斐権現)の本地仏はすべて鎮国寺に保存され、県の文化財となっているのに、孔大寺権現の千手観音は山麓のお堂に移され集落で大切に祀られているものの保存状態は決してよいとはいえないのが残念です。お堂入口に毘沙門天と書いてあるのは、四国の 63 番が毘沙門天だからで、宗像東部霊場は番号だけを踏襲しているということのようです。

この立像の足元に二体の仏の座像があります。これもまた全身を赤い布に覆われているため姿がよく分かりません。見たところ左の弘法大師らしきものはさほど古くはなさそうです。右側の浮彫り様式のものは孔大寺山麓のお堂に多く見かけるものですが仏さまの正体は分かりません。

お堂を出たところで、案内役の篠原壮吉さん（79 歳、中央）も一緒に、参加者全員で記念写真を撮りました。若い参加者のなかの3人は韓国から留学中の人、あるいは宗像で働いている韓国人です。日本の生活に根差している昔からの信仰の姿に三人とも心打たれたようですが、今回の参加者には地元生まれの人がやや少ないのが少し残念です。



次の場所を目指して林の南斜面を下りていると、木立の間に小さな石が立っていました。長老の話では、むかし行き倒れの人があり、その霊を鎮めるための無縁仏で、子どもの頃はこの石に触ると祟りがあると教えられていたそうです。石には何も刻まれておらず、言い伝えだけが残っているのが却って印象的です。

先の札所から南に 100 メーターばかり下った木立のなかに、またもいろんな仏や碑の密集する場所が現れました。まず目を引いたのがこの大きな墓です。正面に大きく「開基西光上人之墓」と刻まれています。現在池野コミュニティセンターから少し北に上ったところにある浄土宗のお寺「東照院」を開いた人で、寺は昔この山のなかにありましたが、火事で焼けて現在の場所に再建されたのだそうです。

この墓のそばに、この辺では珍しい六地蔵があります。

お釈迦様入滅の 57 億 6 千万年後に弥勒菩薩が成仏するまでの無仏時代に、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道にあって、人を救済するのが六地蔵尊だといいます。

仏に満ちた里山を下り再び石原地蔵の前に出て、そこから国道 495 号線沿いに垂水峠の方へ上って行くと、畑を通る「をんが道」との合流点あたりに屋敷跡があります。その入口に小さな祠があって、左右に不動明王が座り、中央に真新しい地蔵が立っています。不動明王の後背は火炎の形で、左の像は右手に三鈷剣を持っています。

不動明王の場所からさらに 100 メーター上ると、再び古い屋敷の跡があり、その入口に今度は写真のような木の仏が三体並んでいます。路傍の小さな祠に木彫の仏とは珍しいこと、しかもかなり古いもののように見えます。

仏像は合板のラックの上に並んでいますが、間に小さな石が置いてあること、棚のなかのお供えが器といい榊といい神式を思わせることから、ここにはまだ江戸時代までの神仏習合の名残が感じられます。

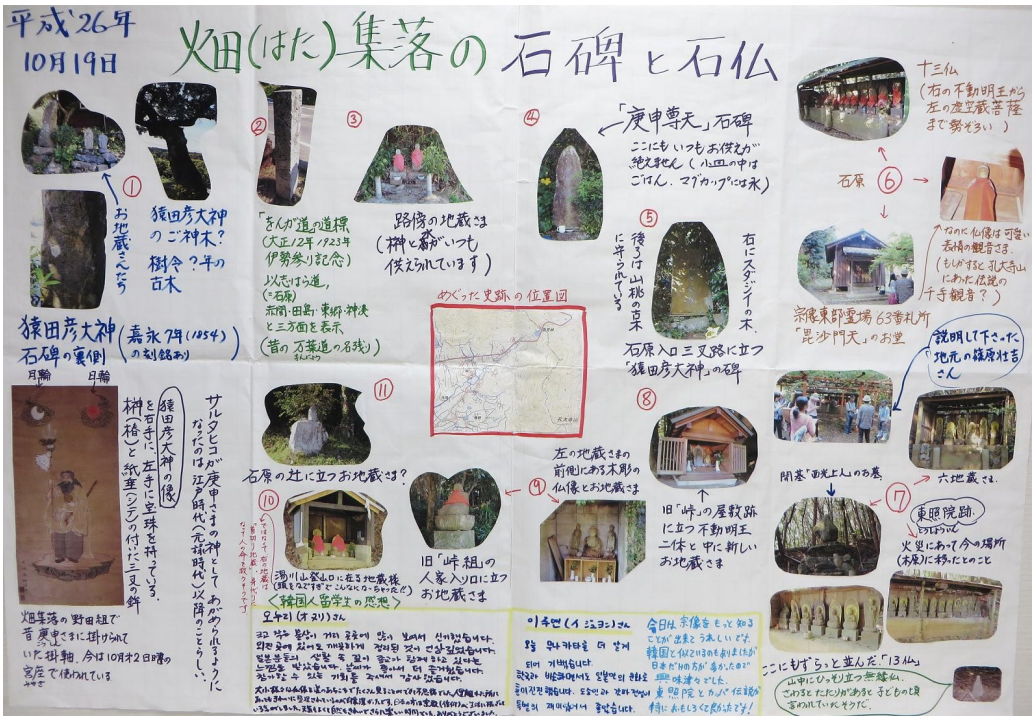
木彫の仏さまたちのすぐ後ろには大きな石のお地蔵さんが、立派な台座の上にどっかと座って、国道を行き交う車を見おろしています。このあたりは「峠」という小字で、元は人家がいくつかあったのですが、今はほとんで別の場所に移られたために周りに家はないのですが、それでもどなたかが今も水や花をお供えに来られるようです。

木彫の仏像とお地蔵さんの場所から 300 メーターほど上ると垂水峠の頂上に出ます。そこには右の写真のような道標が立っています。遠賀郡と旧宗像郡の境を示すものです。この峠は今でこそ車で楽に越えられますが、昔は長い間ふたつの郡を隔てる難所として知られた峠でした。そこから「樽見峠の河童伝説」が生まれました。昔むかし、この宗像から遠賀に行こうとしていた若者に、頼みごとをする者がありました。手紙と樽を芦屋まで届けてくれたらたっぷりお礼をすると言うのです。引き受けて運んでいたものの、峠まで来ると疲れてひと休み、そのとき決して見てはならないと言われていた手紙が気になり開けてみると「この尻で千尻」と書いてあります。何のことだか分からず樽を開けてみると人間の尻が 999 入っていました。自分の尻で千になると知り、そのまま慌てて逃げて行きました。河童の仕業だったのです。「樽を見た」ことからたるみ峠という名前がついたと言い伝えられています。

険しい峠の頂上付近にはたいていお地蔵さんがあるものですが、ご多分にもれずこの垂水峠にも地蔵が2体あります。

右側のは珍しい「首切り地蔵」で、人間の身代りになって命を救ってくれるというありがたいお地蔵さまです。

こうしてわずか 2 時間の散策で見たものは、道標 2 本、猿田彦・庚申塔などの石碑 3 基、お地蔵さま 14 体、十三仏 2 か所、西光上人之墓、宗像東部霊場 63 番札所など盛りだくさんにのぼりました。畑集落には他にまだ庚申塔 2 基、地蔵 2 体があります。また、湯川山中には弥勒大岩と呼ばれる自然石もあるそうです。これらの探索はまたの機会に譲りましょう。 参加者は散策の後池野コミュニティセンターに戻り、さらに 2 時間かけて写真を整理し、次のようなパネルにまとめました。このパネルは 11 月 29, 30 日の池野コミュニティ文化まつりで展示する予定です。



平成26年
10月19日

畑(はた)集落の石碑と石仏

① お地蔵さんたち

猿田彦大神のご神木？
樹令？年の古木

猿田彦大神石碑の裏側（嘉永7年(1854)の刻銘あり）

猿田彦大神の像を右手に、左手に宝珠を持っている。榊(椿)と紙垂(シデ)の付いた三叉の鉾

サルタヒコが庚申さまの神としてあがめられるようになったのは江戸時代(元禄時代)以降のことらしい。

畑集落の野田組で昔庚申(こうしん)さまに掛けられていた掛軸。今は10月才2日曜の宮座(みやざ)で使われている

②

「きんが道」の道標（大正12年 1923年 伊勢参り記念）

以志はら道，(=石原)
赤間・田島・東郷・神淡
と三方面を表示
（昔の万葉(まんよう)道の名残り）

③

路傍の地蔵さま（榊と紙がいつも供えられています）

④

←「庚申尊天」石碑

ここにもいつもお供えが絶えません（小皿の中はごはん，マグカップには水）

⑤ 後ろは山桃の古木に守られている

右にスダジイの木．

石原入口三叉路に立つ「猿田彦大神」の碑

めぐった史跡の位置図

⑥ 石原

十三仏（右の不動明王から左の虚空蔵菩薩まで勢ぞろい）

宗像東部霊場63番札所「毘沙門天」のお堂

なのに仏像は可愛い表情の観音さま．（もしかすると孔大寺山にあった伝説の千手観音？）

⑦ 説明して下さった「地元の篠原牡吉さん」

六地蔵さま．

開基「西光上人」のお墓

東照院(とうしょういん)跡．
火災にあって今の場所(木原)に移ったとのこと

ここにもずらっと並んだ「13仏」

山中にひっそり立つ無縁仏．さわるとたたりがあると子どもの頃言われていたそうだ．

⑧

旧「峠」の屋敷跡に立つ不動明王二体と中に新しいお地蔵さま

⑨ 左の地蔵さまの前側にある木彫の仏像とお地蔵さま

旧「峠組」の人家入り口に立つお地蔵さま

⑩

湯川山登山口に在る地蔵様（頭をなですぎでこんなにかーちゃった!!）

↓ではなくて，右の地蔵は「首切り地蔵」．身代りになって人の命を救ったそうです．

⑪

石原の辻に立つお地蔵さま？

〈韓国人留学生の感想〉

오누리（オヌリ）さん

고고 맑은 불상이 거리 곳곳에 많이 보여서 신기했습니다. 외진 곳에 있어도 깨끗하게 정리된 것이 인상깊었습니다. 일본분들의 생활 속 꿈이 좋고가 함께 하고 있다는 느낌을 받았습니다. 날씨가 좋아서 더 즐거웠습니다. 참가할 수 있는 기회를 주셔서 감사 했습니다.

大小様々な仏像を道のあちこちでたくさん見ることができて，不思議でした．人里離れた所にあっても きれいに整理されていたのが印象深かったです．日本の方は宗教(信仰)が生活に根ざしている感じがしました．天気もよくて自然もきれいでさらに楽しい時間でした．ありがとうございました．

이주연（イ ジュヨン）さん

오늘 무나카타를 더 알게 되어 기뻤습니다. 한국과 비슷하면서도 일본만의 관광도 흥미진진 했습니다. 도슬인과 갓파 전설이 특별히 재미있어서 좋았습니다.

今日は宗像をもっと知ることが出来てうれしいです．韓国と似ているものもありましたが日本だけの方が多かったので興味津々でした．東照院とカッパ伝説が特におもしろくて良かったです！

池野の石碑・石仏を巡る２～田野地区

2015 年 5 月 17 日

池野の石碑・石仏巡りは、昨秋に続いて二回目になります。5 月 17 日（日）は幸い好天に恵まれ、参加者一行 15 名は初夏の日差しを浴びながら、田野地区の五つの集落を 3 時間かけて散策し数多くの石碑・石仏を見て回りました。実際に歩いた順路とは異なりますが西北端の瀬戸集落から紹介しましょう。右は瀬戸公民館の前にある観音堂で、宗像四国東部霊場第 59 番の薬師瑠光如来（やくしるこうにょらい）が祀られています。

御本尊の薬師如来は赤みがかった石に彫られた素朴な石像で、台座には渡村（わたり、現福津市渡）の石工の銘が見えます。その左の石像は比較的新しそうですが、右手に金剛杵（こんごうしょ）を持っているところから、弘法大師像に間違いなさそうです。水が新しく取り替えられ、いつもどなたかがお参りされているようです。

本尊以上に目を引くのが薬師如来の右側にある木彫りのお不動さん・不動明王立像です。背には煩悩を焼き尽くす火炎の光背（こうはい）、右手に迷い・悪魔を断ち切る三鈷剣（さんこけん）、左手に人を引き寄せる縄・羂索（けんさく）、右上腕に腕輪・臂釧（ひせん）を有し、悪魔を降伏させる憤怒の形相で真言行者（しんごんぎょうじゃ）を守っています。また、左右に脇侍（きょうじ、わきじ）として二人の童子を従えています。

観音堂から瀬戸交差点に向かう途中を右に入ると瀬戸のもう一つの札所・番外 61 番奥の院「薬師如来」があります。ここは先ほどのお堂とはうって変わって、コンクリートブロックで囲われた中に、石像や石碑がずらりと並んでいます。地元の方（早川剛弘さん、74 歳）の話では、元々別の場所にあったものを移しまとめて祀っているとのこと、一つ一つが野仏として野山にあったものかもしれません。現地の看板にはただ「宗像四国東部霊場御本尊薬師如来第 61 番」としか書いてありません。しかし、61 番は隣の高向（たかむく）集落にもあるので、地元の方も首をかしげておられましたが、後で調べてみるとこちらの方は番外奥の院だと判明しました。

前頁の写真でずらりと並んでいる石仏や石碑のいちばん右端に、真ん中が折れてコンクリートで修復した板状駒型の石碑が立っています。まず梵字（ぼんじ）が刻まれ、その下に「帝釈天庚申」という文字が読みとれます。猿田彦大神の石碑は田野には見当たりませんが、かわりにこの「帝釈天」の文字が見えるものはこれまでで初めてです。神道系の猿田彦に対してこちらは仏教系なので、もしかすると廃仏毀釈で壊されたのかもしれません。瀬戸のこの庚申塔は元々別の場所のどこかの辻に立っていたと思われますが、今のところその場所はまだ特定できていません。

国道 495 号線瀬戸交差点を岡垣方面に少し上り左に折れると石川集落・一の坪に入ります。何軒か家が立ち並ぶ小集落の入口の辻に立っているのがこの自然石型石碑です。文字はまったく読みとれませんが、これも庚申碑であることは間違いないでしょう。この様式は江戸時代末期に多いそうです。碑の後ろには掲示板らしきものが立っていましたが、何も掲示物はありませんでした。

再び国道に戻り、岡垣方面にまた少し上って右折すると再び石川集落に入ります。その中の一軒花田さん宅を訪れました。その広い庭の母屋脇に立派なお堂が建っています。中に人間の身の丈よりも少し小さい程度の真新しいお地蔵さまの立像がありました。上等な布地の前掛けをまとい、それとおそろいの帽子もかぶった姿です。右手に錫杖（しゃくじょう）、左手に宝珠（ほうじゅ）を持った延命地蔵形式の丸彫り立像です。ご主人の花田初男さんが、敷地内に地蔵堂のある謂れを説明してくださいました。家族によくないことが続いたときに初男さんのお父さんが、占い師から庭にある三角形の石（地蔵足元左）を祀るように言われてこのお堂を建てられたのだそうです。厄除け、家内安全、無病息災を願うという地蔵信仰の原点がまさに今の時代にも生き続けていると言えるでしょう。

花田さんのお宅はイチゴ農家で、お堂にもたくさんのイチゴが供えられていましたが、お邪魔した一行にも食べきれないほどのイチゴをお土産に下さいました。店で買い求めたものよりもいちだんと甘い香りを放つイチゴに、若い参加者たちは特に大喜び、当日は中国・韓国からの留学生も3人参加しており、まさに一期一会の妙に感じ入るひと時でした。

花田さんのお宅の縁側に腰掛けてくつろぐ留学生たち。彼らにとって、日本の農村の伝統家屋に入るのは初めての経験で、特に一間巾の縁側とその奥の広い座敷が印象深かったようです。漢字文化を共有する中国、韓国、日本とはいえ、伝統的な家屋の建築様式はそれぞれ相当大きく異なるので貴重な体験になったことでしょう。

花田さんのお宅から少し下ると依岳神社の鳥居のある四つ辻に出ます。鳥居は湯川山を背景に立っていますが、山麓にある神社までは、途中国道もはさんでかなりの距離があります。鳥居の左右に立っている高いポールは、お祭りのときに幟を掲げるためのものです。

石川の観音堂（第 18 番札所薬師如来）はこの鳥居の向かい側にあります。小さいお堂ですがきれいに整備されています。入口引き戸の上の板に書かれているのは御詠歌です。奥の仏壇には格子戸がはめ込まれています。お堂自体は施錠されていないので、用心のためでしょう。観音堂の管理は集落ごとに少しずつやり方が違うようです。格子戸の前には生花が飾られ、ロウソク立てが二本置いてあります。毎日近所の方たちがお参りを欠かされないのだと分かります。

格子のすき間から苦労してレンズを差し込み写したのがこの写真、変わった色が塗られていますが、おそらくこれが御本尊でしょう。しかし例によって前掛け（それも二重）のせいで仏像の全容は分かりません。

格子の奥にはもう一体仏像がありました。こちらの方がいっそう撮影しにくかったのですが、足元右側の小さい像と同じく弘法大師かもしれません。元々はこんなに厳重な格子を施したりせず、もっと身近に仏さまを拝むことができたのではないかと推測するのですが、心ない人たちのためにやむなくされている防御策なのでしょう。

観音堂のある場所は四つ辻の角ですが、その裏には庚申塔らしき碑が立っています。同じ石川集落・一の坪の庚申碑と同じく自然石型で、こちらも刻まれた文字は判読できません。と言うよりもびっしりとへばりついた苔のせいでそもそも文字が刻まれているかどうかすら定かでありません。おそらく江戸時代にこの近辺の庚申講仲間によって建てられたのでしょうが、今はどこも庚申待ちをするところはないので、この石碑のことはやがては土地の人にも忘れ去られるかもしれません。

石川の東隣りの集落が名見（みょうけん、妙見とも表記）、ここの公民館前には写真のように石碑・石仏が三つ並んで立っています。左の石碑には「庚申牌」元禄十三年と刻まれています。西暦 1700 年にあたるので何と 315 年も前のものです。形が瀬戸のものとよく似ているので時代も近いのでしょうか。真中はただ形のよい丸石にしか見えませんが、きっとこれにも何か謂れがあるのでしょう。右の舟形浮彫りのものはおそらく地蔵でしょう。これも庚申碑と変わらないくらい古そうですが、それぞれ元は別の場所にあったのを公民館建設の折か何かに一箇所にまとめたのかもしれません。今も花や水が供えられ地域の人が大事に信仰しているのがうかがえます。

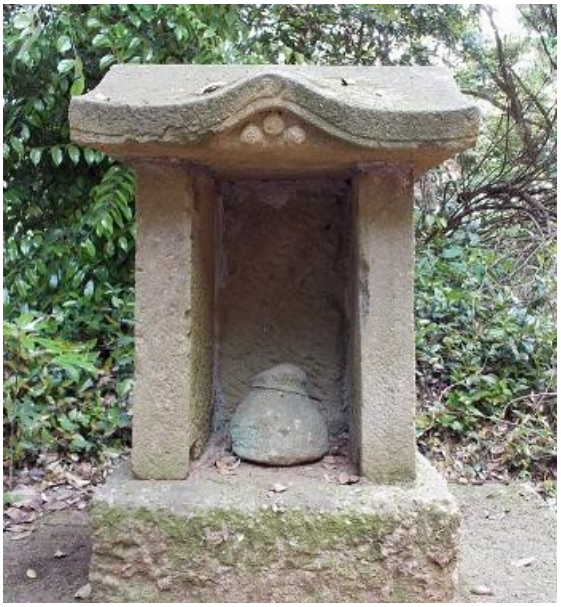
公民館前の石碑・石仏の古さと地元の方たちの素朴で篤い信仰心に感銘を受け神妙な面持ちで見入る参加者たち。

上の写真は公民館から 20 メーターばかり南に下った辻にある名見観音堂「第 47 番札所　阿弥陀如来」です。お堂とは言ってもこれは二体の仏像をコンクリートブロックで囲んだだけのものです。左は石仏、右は木像です。左は円頂ですが、腹掛けで手元が見えないため、地蔵か弘法大師か判別できません。右は頭の様子から阿弥陀如来かもしれません。いずれにしてもかなり古い素朴な木彫の仏さまです。

この観音堂で目を引くのがお堂の前の手水鉢（ちょうずばち）です。天保五年との銘がはっきりと読みとれます。1834 年、今から 181 年前のものです。この手水鉢から推測するにお堂も元はもう少し大きなものだったのでしょう。

野仏を訪ねて回ったこの日、参加者の一人（中国人留学生）が空に面白い形の雲を見つけました。まるでずらりと居並ぶ六地蔵のように見えます。

名見観音堂からまっすぐ南に妙見バス停まで下って、若宮・玄海線を西に少し行くと左に小高い森が見えてきます。5000 分の 1 の地図で見るとまるで前方後円墳の跡のように見える標高 20 メーター足らずの森です。バス通りから入って野道を少し歩くと左に上る小道があります。30 メーターも行くとちょっとした広場に出ます。ここが西ノ山観音堂（第 47 番札所「阿弥陀如来」）です。2005 年の福岡県西方沖地震で倒壊し建て替わったそうなので、まだ真新しいものです。しかしいつ来ても錠がかかっているうえに、窓もなく中を伺うことすらできません。知らなければ観音堂とは気づかないかもしれません。区長さんにお願いして見せてもらうつもりでしたが、その区長さんもあいにく不在とのことで叶いませんでした。これまで3度訪れましたがいずれもお参りできず却って興味がそそられます。



観音堂に向かって左側の広場隅に古めかしく、やや凝った造りの石祠があります。中には左の写真のように小さな石が祀ってあります。よくある丸石や三角石ではなく、ちょっと面白い形をしています。最初はきっと何か謂れがあったはずですが、果たして今に至るまで語り伝えられているかは不明です。この後訪ねる厄除地蔵尊のお堂にあるのと形がよく似ています。

広場の観音堂の反対側には石碑が一本立っています。上部に梵字、その下に「法華経一字一石塔」と刻まれています。こういった塔は各地にあるそうですが、池野では初めて見ました。謂れによれば法華経全 65000 近くの文字を小石に一字ずつ書いたものを埋め、その上に追善や供養の目的を書き記した塔を建てるのだといいます。この塔にはそのような内容は刻まれていませんが、寛政九年五月吉日という文字は読みとれます。1797 年、つまり 218 年前に建てられたことになります。この風習は江戸時代に流行したそうですが、ここの塔はどんな過去を秘めているのでしょうか。塔の下に本当に6万を超える数の石が埋められているのか興味がそそられます。

一字一石塔の右隣りにはずらりと舟形地蔵が並んでいます。しかしその数は6体ではなく、9体です。左の2体だけが明らかに他の7体よりも新しいものに見えます。六地蔵ならともかく、このような並び方は珍しいのではないでしょうか。

いちばん右の地蔵の台座を見ると「田野村四国同行中」という文字が判読できるので、明治 22 年の池野村への合併以前、もしかすると江戸時代くらいに四国の巡礼に同行した村人仲間が寄進したものなのでしょう。この広場はちょうど前回の畑集落石原の山中と同じように、神仏の霊気のようなものが漂っている感じのする空間でした。

観音堂と広場をはさんだ向かい側には古い石段があり、そこに立てば右に手水鉢、左に石灯篭、そして正面に観音堂という配置になっているので、昔は下の道から来てこの石段を上ってお参りしていたのでしょう。

観音堂から元の道に下り、左に曲がってさらに奥に進むと、草木がまるでトンネルのようになっていて、一行を森林浴に誘ってくれました。そのトンネルを抜けるとそこは「鎧塚（よろいづか）」でした。

この石塔については江戸時代の国学者青柳種信（1835 年没）の『筑前國續風土記拾遺（ちくぜんのくにしょくふどきしゅうい）』に「塔の元といふ所に、鎧塚とて有。神功（じんぐう）皇后三韓より凱旋し給ひし時、甲冑（かっちゅう）を埋め給ひし處といひ傅ふとも不詳。（中略）里民は祟（たたり）有とて、此森の中に入事なし。」とあります[10]。この石塔は宝篋印塔（ほうきょういんとう）という様式で、鎌倉中期から見られるものですが、上部の隅飾突起が外側に反っているのは江戸時代の様式だそうです。本来はてっぺんに九輪（くりん）と呼ばれる尖塔が付いていたはずですが折れてなくなっています。明治から昭和20 年までの皇国史観のもと「神功皇后三韓征伐」は栄光の歴史であるかのように扱われていましたが、いまは『古事記』や『日本書紀』にあらわれるオキナガタラシヒメノミコト（後に神功皇后と称す）が新羅を征討したという物語がそのまま史実だと考える歴史学者は多くないようです。皇后の実在すら疑う説も根強いようです。しかし福岡の神功皇后にまつわる伝承は枚挙にいとまがないほどです。香椎宮をはじめ宮地嶽神社さらには地元の産土神（うぶすながみ）依岳神社にいたるまで、神功皇后を祭神とする神社も数多くあります。

鎧塚から少し離れたところにコンクリートブロックに囲まれて二体のお地蔵さまが並んでいます。野ざらしの状態よりもむしろ窮屈そうに見えるのは気のせいでしょうか。

西ノ山観音堂と鎧塚を後にして再びバス通りに戻り、左に少しばかり歩いた道路の向かいにこのお堂が建っています。中には大きく「厄除地蔵尊」と書かれていますが、右の宝珠を持った座像が地蔵菩薩なのは明らかだとしても左の小さいのは何なのでしょう。「厄除け」という趣旨から想像すれば、首のない地蔵（首切り地蔵）で、人の身代りになって命を救う地蔵でしょうか。形だけ見れば男性器に似て、豊作や生殖（子宝）のシンボルと取れなくもない気がしますが、これについては改めて地元の方のお話を伺うしかありません。

厄除地蔵から西に少し行き、高向交差点を左折してしばらく歩くと右手に高向公民館が見えてきます。その敷地内に高さ3メーター近くはあろうという立派な石碑が立っています。地元の花田昌猪（まさえ）さん（83 歳）がその謂れを教えてくださいました。高向生まれの入江栄太郎という方が戦前代用教員から始めて永年岬（鐘崎、上八こうじょう）や地島（じのしま）の小学校で教壇に立たれたそうです。特に地島では大正 5 年（1916）から昭和 3 年（1928）まで校長を務められ、退職後は岬村（現鐘崎、上八）や池野村（現田野、池田）の神職を務められましたが、昭和 22 年に亡くなられました。教え子たちがその徳を称えて翌 23 年に建てたのがこの碑だそうです。今ではとても考えられないようなエピソードで、よほど生徒に慕われ敬われた先生だったのでしょう。

左端の人が花田昌猪さん。入江翁顕彰碑の前でみんなに入江先生のことや道路をはさんで反対側（写真右上隅）にある吉田土佐守の墓のことなどを教えてくださいました。

写真左が吉田土佐守守致（とさのかみもりとし）の墓で、一石五輪塔といわれる様式です。この形は武士の墓に用いられ、下の角石から順に地・水・火・風・空を表しています。これを仏教で、世界を構成するすべての要素という意味で五大（ごだい）と称しています。吉田家は宗像家の重臣のひとつで、宗像家が氏貞を最後に秀吉によってお家断絶とされた後、江戸時代に入ると黒田藩に仕えて田野一帯の年貢米を管理していたそうです。この墓から北西の方角に米蔵があり、そこから田野浜の米出（こめだし）というところまで運んで船に乗せていたとのこと、その米蔵は花田さんが青年の頃まで残っていて、花田さんは解体の作業に従事したことがあったそうです。土蔵の壁の厚さが普通の倍以上もあったのが印象に残っていると話してくださいました。同時に地元の人には年貢米の取り立ての厳しさが語り伝えられ、花田さんも話に聞いていたそうです。その話を聞いた後改めて墓を仔細に眺めてみると、右側の石碑に刻まれた戒名「明岩紹金居士覺霊」が意味ありげに思えてきます。「紹」は「招」と同系の文字なので、「金を引き寄せた」と読めなくもありませんが、まさかそんな露骨な戒名を付けたりはしないでしょうからこの戒名の意味をぜひ知りたいものです。没年は寛永九季と刻まれており、これは 1632 年にあたります。ところで池田畑集落にも吉田一統の墓があります。そちらの方は自然石に大きく「宗金居士」と刻まれた吉田伯耆守重致（ほうきのかみしげとし）の墓です。土佐守の墓と同じくこちらにも「金」の字が入っています。ちなみに土佐守や伯耆守といっても、高知や鳥取とは何の関係もありません。大岡越前守が越前の国と無関係なのと同様です。玄海の歴史の本をめくると他にも、石松加賀守、占部甲斐守、占部越前守、高橋伊豆守などの名が目につきます。〇〇守とはつまり武士の名前にメリハリをつける飾りのようなものなのでしょう。この吉田土佐守のご子孫は今はよその土地に住まわれ、しばらく前までは時々来られて墓の守りをされていたそうですが、最近は姿を見せられていないとのことでした。

高向公民館の裏手に観音堂があります。第 61 番札所「大日如来」です。四国の第 61 番札所は愛媛県の香園寺で、聖徳太子が建立したとか、弘法大師が唐から持ち帰った金の小さな大日如来像を本尊としたなどの言い伝えのある古刹ですが、宗像四国東部霊場第 61 番であるこの高向観音堂もお堂としては立派な造りになっています。

お堂の中には石仏が三体、中央が密教の中心仏である大日如来、修験道との関わりが深い仏です。右がその使者不動明王でしょうか。そして左は円頂であるうえに右手に金剛杵（こんごうしょ）らしきものが見えるので、もしかすると弘法大師かもしれません。

観音堂の左手には石の祠が二つ並んでいて、中にはそれぞれ素朴きわまりない石仏や石が祀ってあります。左の祠には右側にまたも厄除地蔵堂にあったのと似た石が見えます。その左隣のは尖塔の一部のようにも見えますが、いずれも正体は不明です。

二つの石祠の左に庚申碑が立っています。「庚申本地大日尊」とかろうじて読みとれます。「大日」の名が付された庚申塔はこれまでで初めてです。かなり古そうでうが、板碑型なのと大日とあるところから、修験道との関わりを想像させます。

高向公民館前から県道を宗像大社方向に 800 メーターばかり行って左に折れすぐに右折する(本田野橋を渡る)と左に本田野公民館があります。その敷地内左隅に古びた観音堂が立っています。第 52 番札所「十一面観音」です。広いお堂は個人の寄付で建てられたものだそうですが、今は集落がお世話を止められたそうで少し荒れた感じになっています。

左の石仏が十一面観音ですが、浮彫であるため彫られているのは正面の三面のみで、「慈悲」を表します。本来は他に左三面(憤怒)、右三面(牙をむく)、後背一面(大笑)、頂上(仏果＝阿弥陀)があります。胸のあたりの白い斑点はヤモリの卵の跡です。右の石仏は珍しく宝冠をいただいているので、もしかすると大日如来かもしれません。

この日の石碑・石仏めぐりは次のように2枚のパネルにまとめられました。

コラム：田野の宗像四国東部霊場

田野には「番外奥の院」を含め全部で7ヶ所の札所があります。歴史は江戸時代以前と言われるほど古いものです(『玄海町誌』)。四国の場合は大半が真言宗の寺院ですが、池野の霊場はほとんどがお堂です。明治期に釣川を境に東西に分け、世話人が協議して「千人詣(せんにんまいり)」の日程を決めたのだそうです。春は4月5日～8日、秋は 10 月5日～8日で、去年(2014 年)の秋と今年の春は西部霊場の番だったので、今秋と来春は東部霊場の番になります。「西の高野山」と呼ばれる鎮国寺には東西の区別なく必ず参拝します。千人とは「数多い」の意味の誇張された表現で、盛んなときでも実際に一回に千人の巡礼があったわけではないでしょうが、最近はお参りする人の数が年々減り、今では 40 人程度だそうです。昔は歩いて回っていたので民家に泊まっていたそうですが、今は車で回るので宿泊の世話まではしなくなりました。しかしそれでもお茶やお菓子でもてなす「接待」の習俗は今なお続いているそうです。

田野の石碑・石仏巡り①
瀬戸 番外61番奥の院
薬師如来
至 鹿崎
別の場所から移され、ブロックに囲まれた壇上に石仏、石碑が居並ぶ。
石碑の石碑は真中が折れ、コンクリートで接続されているが「庚申塔」と書かれている。
至 神浦
瀬戸第51番札所 薬師瑠璃光如来
不動明王木像
火炎の光背、右手に三鈷剣、左手に羂索、右上端に賢剣を有し、金箔の彩色で美しい仕上がりを保っている。
薬師如来石像
白壁に黒羽石工の銘
二人の童子を脇侍に
石川の辻に立つ庚申碑？
（銘文が見えない）
至 岡崎
国道495
一の坪橋
田野の宗像四国東部霊場
瀬戸交差点
田野には「番外奥の院」を含め全部で7ヶ所の札所がある。歴史は江戸時代以前と言われるほど古い。四国は真平が真言宗の寺院だが宗像のほとんどがお堂だ。
明治期に釣川を境に東西に分け、世話人が編成して「千人講はーツ」の日程を決めた。春（4月5日～8日）は西部、秋（10月5日～8日）は東部を巡るが、「西の高野山」と言われる鎌田寺には東西の区別なく必ず参詣する。千人と言いながら実際は40人くらいだが、昔からの「接待」の習俗はまだ形をとどめている。
高向交差点
高向 厄除地蔵尊
日本の産婦を初めて見て感激の留学生
石川の観音堂
第18番札所 薬師如来
石川
花田初男さんの屋敷内にある地蔵堂。立像台下の三角形の石には出来話があるとのこと。
この後、金神社入口の小側の辻に庚申塔があっていた
庚申塔
元禄13年（1700年）の銘
地蔵菩薩像（高さ1m）
宝暦4年（1754年）の銘
名見公民館前

田野の石碑・石仏巡り②
高向観音堂 第61番札所
大日如来
お堂石寺の地蔵尊と庚申碑（庚申本地大日等とかろうじて読み取れる）
中央が大日如来、左は地蔵尊
右は不動明王
入江前頭彰碑（高向公民館前）
入江前は退職後 岬村 地野村の神職を勤められたとのこと。
至 宗像大社
高向 西の山観音堂
第51番札所 釈迦如来 文殊3体 普賢本像2体
お堂は施錠されていて中は見られなかった。
六地蔵の形の霊が現れた！
「トンネルを出るとそこは鐘塚だった」
神功皇后伝説を秘めた 鐘塚
吉田土佐守の墓（高向）
五輪の意味
五輪塔は武士の墓
右側の石碑には
宗 覚永元年（1123）
鵜 明治28年 土佐守
と刻銘がある
本田野の観音堂（本田野公民館正面）
第52番札所 本尊 十一面観音石仏
名見観音堂
第47番札所 阿弥陀如来
（石の本尊）の仏像
左は 円頂（ひげそり）
右は「地蔵菩薩」
鐘塚近くの地蔵、仏が並んで今はブロックの囲いに囲まれている
鐘塚は宝篋印塔（頂上の尖塔（九輪））が父様
神功皇后伝説の石にも、いにしえの人の暮らしが花開いていたのかもしれない
青柳種信『筑前国續風土記拾遺』
「場の元という所に鐘塚とて有、神功皇后三韓より凱旋し給ひし時、甲冑を埋め給ひし塚といひ傳へ、とも下説（中略）里民は畏れて此塚の中に入事なし」
神功皇后は田野の産土神「依頼神社」の祭神のひとり。祭礼には参加が多い。『日本書紀』に事が詳しい（巻九）が、虚実がないまぜになっており、歴史学的には そのまま史実とはみなされていない。皇后の実在を信じる説も根強い。
十一面観音石仏
左の石仏が十一面観音だが 彫られているのは正面の三面のみで、「慈悲」を表わす。本来は他に左三面（怒荒）、右三面（菩薩）、背後一面（大笑）、頂上（仏菩薩）がある

引用文献:

[1] 吉本哲郎:「地元学をはじめよう」p.33 に吉本家と周辺の絵地図。岩波書店(2008 年)

[2] 船津 建・平尾健二・藤本 登・志賀壮史:「大学と地域の連携による綜合的な学習の実習例―宗像市地島をフィールドとして―」福岡教育大学ファカルティ・ディベロップメント研究報告書(8)第 1 分冊 pp.31-37 (2007)

[3] 吉本哲郎:「風に聞け、土に着け」現代農業 5 月増刊 農文協 (2001)

[4] 石井 忠:「漂着物事典」海鳥社 (1986)

[5] 望月信成:「地蔵菩薩」 pp.36-38 学生社 (1989)

[6] 古賀 登:「猿田彦と椿」 p.53, p.60 雄山閣 (2006)

[7] 玄海町史話伝説編纂委員会:「玄海町史話伝説」p.66 玄海町教育委員会 (1995)

[8] 玄海町誌編纂委員会:「玄海町誌」pp.68-107 玄海町 (1985)

[9] 同上 p.553

[10] 中村正夫編校訂:「宗像郡地誌綜覧」p.415

コラム

「北斗の水くみ研究」
コンパクトデジタルカメラを使っての星座撮影

北斗の水くみ写真展実行委員会

平松秋子・堀内伸太郎・平井正則

１．はじめに

北斗の水くみ写真展も、来年・平成２９年度で１０回目となります。

これまでの応募作品は天文写真としても、芸術作品としても素晴らしい作品です（各年度北斗の水くみ写真展のページ参照）。しかし、近年出品者数は少なくなっているように見えます。また、応募作品はデジタル一眼レフで撮られたものが多数です。そこで、たくさんの方々に参加していただくために、費用も安く取り扱いも簡単で、カメラまかせで写すことができる、コンパクトデジカメを　使った撮影方法を、紹介します。

北緯３４度付近にあり、北に海や湖がある場所に限ってみることができる、北斗七星が海に沈み　水をくむという自然現象を、宗像地域の海岸で見ることができるのです。このように地球上でも数少ない、大変恵まれた場所に私たちは住んでいます。

玄界灘の水平線上に北斗七星が降りてきて水を汲み、また昇っていくという、大変雄大で神秘的な光景をカメラに収めてみましょう。

２．コンパクトデジタルカメラの種類

コンパクトデジタルカメラのメーカーにはキヤノン、パナソニック、フジ、ソニー、カシオ、ニコン、オリンパスなど（順不同）があり、様々な機種を販売しています。近年発売されたものは、ほとんどのメーカーに、星座を写せる「星空夜景」モードが備わっていますが、購入時には、必ず確かめておきましょう（古い機種が販売されていることもあります）。星空夜景モードの備わっているカメラの価格は販売店で異なりますが、平成２８年時点でおよそ２万円から５万円ほどです。

三脚は手ぶれ防止に必要なので別途購入します。種類も価格も様々なタイプがあります。サイズは持ち運びのときの長さと、脚を伸ばした場合の最高の長さを調べましょう。伸ばした時の長さが短いと、撮影場所にフェンスなどがある場合には適しません。材質はアルミ製が多く、透明なプラスチック製などもあり、価格は店舗によって違いがあります。カメラを安全に取り扱うには、ある程度の重量も必要です。

３．撮影前の準備

むなかた電子博物館で配布している「北斗の水くみダイアル」を回して、撮影に出かけられる日時をもとに、気に入った「水くみ」の形を決め、天気予報や月齢を調べ、撮影する場所を選びましょう。自動車のライトが直接当たる場所、街灯や看板のライトが直接射す場所は不可です。

天候は重要な条件で、北斗七星の見える北の空が晴れていることが必要です。主に、車の行き交う夕方は宗像の都市化もあって薄雲が停滞します。都市化によるヒートアイランド現象で市街光により薄雲が光り、星が霞みます。なので、７月中旬から８月末の夜明け前から深夜にかけての撮影期を推奨します。

この時間帯だとカメラや三脚に夜露が付く可能性があるので、機材を一旦外に出して気温と同じ温度になるのを待って、撮影にとりかかりましょう。夜間なのでペンライトを用意して、機材を撮影地で紛失しないように注意します。撮影は５分もあれば終了ですが、少し場所を移動して北斗を観察してみるなど、余裕をもって撮影しましょう。ただし、夜間なので事故には十分気をつけましょう。

月のない闇夜、新月（月齢０日）前後が良いのですが、満月でも北斗の水くみは北の空に見えるのであまり撮影には影響ありません。ただ、明るい月（月齢１５日前後）があると、写る（見える）星の数が減るとか、薄雲や霧が光るので空全体が光り、邪魔になります。

４．撮影の手順

気に入った構図を決めて、まず三脚でカメラを固定し、好きな向きに撮影してモニターで確かめます。カメラは肉眼より一般に感度が良く、目で見てかすかな星も写ります。そこで、写っている北斗の姿をたしかめ、風景とのバランスを見て、気に入ったものを選びましょう。シャターボタンを押して、これで撮影は終了です。

時間や、天候や月齢、知っている明るい星や星座の位置も事前にメモしておきましょう。

- 大熊座の尻尾から背にかけて、北斗七星がある。
- 北斗七星の柄の端から２つ目は二重星で肉眼でも見ることができる。ミザール（２等星）の傍にアルコル（４等星）がある。
- 升の外側の深さを５倍すると北極星（２等星）がある。これはこぐま座の尻尾である。

など参考にしてください。

５．星空夜景モード・オートで撮った作品

下の写真（図１）はキヤノンパワーショット S120 で撮影した作品です。

カメラユーザーガイド[1]には書かれていませんが、カメラ内部で比較明合成（コンポジット）が行われていると思われます。比較明合成（コンポジット）とは、２枚以上の写真を比較し、明るい　部分だけを合成して１枚の画像にすることです。

実際に、星空夜景モードを選び、カメラを三脚に固定して、シャッターボタンを押し撮影開始。撮影が終わりシャッターが自動的に閉じて、モニターに「処理していますしばらくお待ちください」という文字が出ます。次の撮影までにはしばらく時間がかかります。以下はユーザーガイドにある説明です。

> “　撮影後に合成処理を行うため、次の撮影までにしばらく時間がかかります。星の光を強調する処理をしないときは、タブで「星の強調」を「切」にします。「暗所表示」を「入」にして撮影することをおすすめします。星の位置をより細かく合わせたいときは、マニュアルフォーカスでピント位置を調整してから撮影することをおすすめします。ホワイトバランスを補正して、市販の色補正用フィルターと同じような効果を得ることができます。

Ｓ１２０はカメラまかせで撮影できます。しかし、もっと自分らしい写真にしたいと思った場合、メニューを選んで設定し、一歩進んだ写真撮影をすることができます。また最新のコンパクトデジタルカメラの機種では、「動画撮影の機能も進化して、ピントがよく合い、軌跡がより鮮明にわかるようになり、これまでより天文写真に近づくことができるでしょう」という、メーカーの話でした。

（図１）キヤノンパワーショット S120 を使った写真　2016.10.06 21：50 撮影

カメラまかせで撮影した写真も、パソコンに取り込んで撮影時のデータを知ることができます。

＜（図１）のデータ：　・大きさ 4000×3000　・絞り　F1.8　・露出 15 秒　・ISO 800＞

この撮影を行った夜は、晴れて大きな雲もなく撮影に最適な天候でした。北斗の水くみ公園海岸から、大島と地島を入れた星空夜景です。水くみはすでに始まって、ひしゃくの部分は海の中へ沈み、七つ星のうち四つしか撮れていません。モニターでは見えませんでしたが、パソコンに取り込んで　見ると、夜空に輝く無数の星が写っていました。これは比較明合成（コンポジット）が自動的に　　カメラ内部で行われたことによるものです。

下の（図２）は、キヤノンＡ１１００　ＩＳを使って６年前の同じ日に撮影したものです。時刻は違います。

（図２）キヤノンパワーショット A1100　IS を使った写真 2010.10.06 21:08 撮影

＜データ：大きさ 4000×3000　　・絞り　F2.7　　・露出 15 秒　　・ISO 400＞

※この写真は水平線が傾いています。水平線は水平となるように写しましょう。（図１）は水平になっています。

図１と比較してみると、カメラまかせで撮ったにもかかわらず、データでは、絞り、ISO 感度に違いが見られます。

このカメラはキヤノンパワーショット S120 の前期のモデルで、比較明合成（コンポジット）はありません。明るい星のみ写っています。

この写真は、あと少しで水くみが始まるという北斗七星の姿です。撮影時に三脚を砂浜に立て、 倒れてレンズを傷つけてしまい、バージョンアップした新機種 S120 に買い替えたという、いきさつがあります。

晴れて厚い雲がない撮影に良い条件で、これを逃すと薄雲に水平線が覆われるかもしれないと思い、一気に１０枚ほど撮った中の１枚です。七つの星はすべて写っています。良い気象条件と水くみの　時間が合えば、このように撮ることができます。

６．終わりに

美しい風景を撮りに行くように、家庭で手軽に使えるコンパクトデジタルカメラと三脚を使って、撮影にでかけ、星座を写す「北斗の水くみの撮影法」を、実際に撮影した作品を示して説明しました。

手に入りそうな機材、撮影準備と、撮影時期から撮影の注意、撮影の手引きとして実際の作業、　具体的な撮影作品とその評価などを報告しました。これらを参考に、好きなショットが撮れたら早速、「コンパクトデジカメ」と但し書きを入れて、むなかた電子博物館北斗の水くみ写真展に投稿しましょう。

何回も挑戦すると楽しくなりますよ！よい季節や時間、星のきれいな空に出会う機会なかなかないものです。

カメラまかせで撮ることになれてきたら、より進化した連続撮影をして、星の軌跡を画像に表す　こともできます。

この他、世界中の北斗七星の写真も募集しています。

多くの方々の挑戦を、北斗の水くみ写真展実行委員会ではお待ちしています。

参考資料：

[1]　キヤノン株式会社・キヤノンマーケティングジャパン株式会社:
「キヤノン　パワーショット S120　カメラユーザーガイド」
電子版：http://gdlp01.c-wss.com/gds/4/0300012364/01/pss120-cu-ja.pdf　（2017.2.6 閲覧確認）

16/07/03

新発見に期待！新修宗像市史編さん始まる

合併前の旧宗像市、玄海町、大島村にはそれぞれの歴史・文化を知ることのできる『宗像市史』、『玄海町誌』、『大島村史』が刊行されていました。現在の宗像市は、平成 15 年に玄海町と、平成 17 年に大島村との合併を経て現在に至ります。これら平成の大合併から約 10 年を機に、市の自然や歴史を総合的に捉えようと、新しい宗像市史の編さんの取り組みを開始しました。

編さん期間は、平成 27 年度から平成 31 年度までの約 5 年間。この間に、これまでの研究や成果を基礎にしながら、有識者の協力を得て調査・整理を行うとともに、今回、新たな試みとして市民の皆さんとの協働により地域の歴史・文化の掘り起こしと再発見に取り組みます。

現在、新しい宗像市史の編さんのなかで特に危惧されているのは、これまで地域の生活や習慣の中に根ざして存在してきた自然・歴史・文化の消失です。

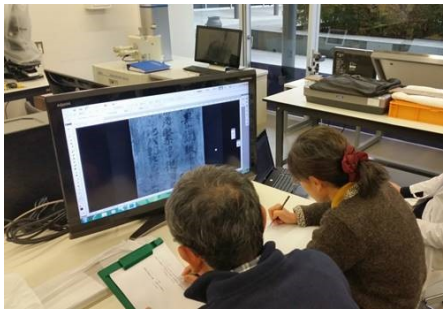
宗像は、福岡市や北九州市のベットタウンとして昭和 40 年前後に大規模な宅地開発により一気に都市化し、生活様式が一変した時代がありました。その後も継続して、住宅地や交通網が整備され宗像各地で都市化が進みました。都市化した地域では、地域のつながりも希薄になり、その中で忘れ去られ消えていく歴史・文化があります。たとえば、地域と共に歩んできた神社のお祭りや境内の文化遺産などで、今回の編さんでは、これらの調査・記録にも重点を置いています。

棟札とは、建物の棟上げや再建、修理の時に工事の由来、建築の年月、建築者や工匠などを記した木札のことです。棟札は書かれた文字を読み解くことで、当時の時代背景や社会構造を知ることができる貴重な文化遺産です。木製の棟札は、朽ちるともちろん無くなってしまいますが、過去には建物の解体時に散逸し廃棄されてしまったものもあったと聞きます。

最近の調査例では、王丸八幡神社や依岳神社の棟札があります。文字は墨で書かれていますが、一部判別しにくい部分は、九州歴史資料館で赤外線スキャナを用いて解読しました。

今回の調査では最新の調査機材を使用することで、これまでの研究や調査にはなかった新たな発見の可能性も期待されています。今後の調査成果にご期待ください。

（新修宗像市史編さん事務局）
新修市史編さん事業について詳しくはこちら
むなかたタウンプレス　平成 28 年 2 月 15 日号
http://city.munakata.lg.jp/w001/050/050/1850/06.pdf
むなかたタウンプレス　平成 28 年 6 月 15 日号
http://city.munakata.lg.jp/w001/050/050/2010/28061504.pdf


機器を使い文字の判別を行っている様子

神社に保管されていた棟札

16/07/04

謎の蝶アサギマダラ

1. アサギマダラはどんな蝶?

羽根の白く見える部分が「浅葱(あさぎ)色」であることから「アサギマダラ」と呼ばれています。浅葱色とは日本古来の色名で、神主の袴の色でもある淡い空色のことです。アサギマダラの半透明の羽は太陽に透かすと水色に見えます。(図 1)

図 1　ホルトノキで吸蜜する　平成 27 年 7 月　自由ヶ丘南にて

水色の部分は鱗粉が無いので、マーキング(標識)ができます、その蝶が移動し各地で再捕獲されます。

2. 移動するアサギマダラ

アサギマダラは春に台湾・沖縄から北上を始め、宗像には 5 月にスナビキソウに飛来し世代交代をしながら、東北や北海道まで北上します。その後秋になると南に向かって移動を開始しますが、宗像には 9 月から１０月に南に向かって移動する時に、ヒヨドリバナやフジバカマに飛来します。下の図は宗像のアサギマダラが屋久島・奄美大島で捕獲されたデータです。

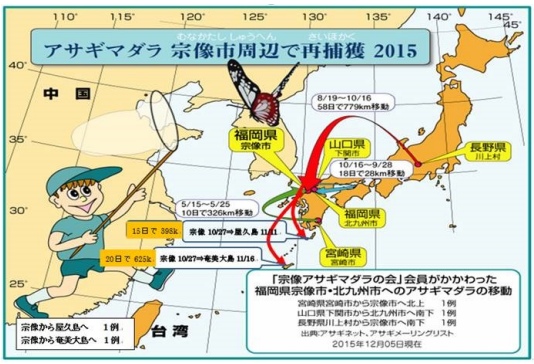


図 2　宗像に関する移動図

3. 宗像アサギマダラの会

「宗像市環境リーダー育成講座」卒業生が集まって 27 年 3 月から活動が始まりました。

西田先生(むなかた蝶類研究会)の講座「生物多様性」の中で、城山で幼虫が生まれていることを教えてもらいました。(右端が西田先生)。この時から会を作って活動を続けようと声が上がり結成に繋がりました。会員は 54 人(子どもを含む)になり活動を進めました。5 月の北上蝶にマーキングしている時に宮崎の蝶を捕獲しました、秋には南下の蝶に標識をし

たものが屋久島と奄美大島で捕獲され、宗像から南の島へゆくコースが分かりました。

環境地域づくり研究所　　前田 秀敏

16/08/14

いせきんぐ宗像の周年祭が行われました

昨年、７月１９日に全面オープンした「いせきんぐ宗像」（田熊石畑遺跡）で、周年祭が行われました。 主催は宗像市教育委員会、主管は田熊石畑村づくりの会、協力は東郷地区コミセン運営協議会です。

７月２３日土曜日、真夏の太陽が照り付ける約１万坪の歴史公園は、緑の芝生に覆われ、市街地とは思えない広い空間です。 園内には、体験学習や、出店など、２８のテントが並びました。

今回は、１３時から体験学習がスタート。

１５時、セレモニーが始まり、遠矢教育長と田熊石畑村づくりの会から山田村長の挨拶がありました。

続いて、ステージイベントが始まりました。

ステージに上がり挨拶をする　宗像市・遠矢教育長

いせきんぐ宗像村づくりの会　山田村長の挨拶

出演者はプレスリーそっくりの衣装で、本人の歌を物まねする・テラヴィスさん。人気のバンド・クアトロックのライブ、つづいて、

まりこふん・古墳でコーフンショー。締めくくりは出演した３組が総出でミニコントとライブ。音楽中心の楽しいイベントでした。

プレスリーそっくり、テラヴィスさん

暑い夏にはロックを、「クワトロック」

昨年に続き、パワーあふれるステージは、まりこふんさん

まりこふんさんは、世界遺産の構成資産である､｢新原･奴山古墳群の歌｣を作詞作曲し、本日初披露となりました。また、いせきんぐ宗像周年祭マンスリー特別企画として、７月の土･日には｢弥生人の暮らし体験｣が開催され、竪穴住居の模型の組み立てや、火おこし体験が行われ、公園内の寄合どころでは、海の道むなかた館の移動博物館があり、宗像市教育委員会制作の遺跡を紹介したビデオと、田熊石畑村づくりの会が自主制作した、いせきんぐ宗像プロモーションビデオが放映されました。また、村づくりの会で制作した｢いせきんぐへ行こう｣というイメージソングも披露されました。

体験学習の参加者には、今回制作されたカンバッチ２個のプレゼントが配られました。

遺跡は保存のため、すべて地中に埋め戻されています。墓域から出土した武器形青銅器は、海の道むなかた館の特別展示室で見ることができます。今回、移動博物館として、そのうちの３点が｢寄合い処｣で展示されました。

来場者に遺跡を実感してもらえるよう、村づくりの会により、実物大の絵が布に描かれ、掲げられていました。

直径 60ｍの環濠は深さ 3.5m 幅 3～4m のＶ字溝で囲まれていました。 復元された小さな２棟の建物の地下は、深さ 1.5m 直径 1.2～1.5m のフラスコ型の貯蔵穴になっています。

Ｖ字溝の実物大の図

貯蔵穴の実物大の図

区画墓から出土した武器形青銅器のレプリカを展示

実物の 2 分の 1 の大きさの竪穴住居を組み立てる体験学習が行われた。

弓矢体験は広い園内を利用して思い切りできる

勾玉づくりも人気

うちわの骨組みを利用して前方後円墳などの古墳型うちわをつくり、まりこふんのステージを盛り上げた

土器パズルは、磁石のついた部品を組み立てて、弥生土器を復元

原始機（げんしはた）はたおりの原理を体験

13 時から 17 時までの短い時間でしたが、およそ 3000 人の人々が訪れました。この後、

17 時からは東郷コミセンによる、「夏まつり東郷 2016」が始まりました。

宗像市と地域コミニュテーと市民の協働による歴史公園の運営が、今後も発展していくことが望まれます。

宗像電子博物館運営委員 平松秋子

17/01/02

いせきんぐ秋祭り が開催されました。

平成 28 年
11 月 27 日、日曜日。いせきんぐ秋祭りが開催されました。

朝から雨が降り傘をさしての来園となりましたが、11 時から始まる、古代食体験をしょうと、3 張のテントの前に大勢の人が集まり、用意した 100 人分の無料の古代食はすぐになくなりました。

古代食は、1 つのプレートに、赤米ごはんとジビエ（イノシシ肉）の焼肉で、事前に塩こうじに付け込んだ肉は大変味も良くおいしい肉になりました。それに、ソバがき、太古菜スープ、炒った銀杏とシイの 5 品を盛り付けたものです。弥生時代に食べられていた食材を主として調理されています。

また、赤米は村づくりの会が当地で栽培したもので、やぐらにかけて天日干しにしたものです。このほか、同じく栽培して収穫した、サツマイモ、落花生をアミで焼き、ふるまわれました。試食した方々の感想は「とてもおいしかった」ということです。

寄合処では、コーラスグループ「ピュアーミント」のメンバー8 人による、いせきんぐ宗像のテーマソング「いせきんぐへ行こう」の発表会が行われました。案山子やイノシシ、シカの置物を背に、軽快なリズムに乗って、明るい歌声が会場に流れました。

この他、「365 日の紙飛行機」も歌われ、参加者も一緒に口ずさみ、アンコールの声がかかるほどでした。

寄合処では、出土した青銅製の武器や土器の展示があり、壁面には田熊石畑遺跡の写真がならび、歴史公園について、知ることができる場所です。

いせきんぐ「村っこ」たちの作った案山子や、弓矢体験の的、イノシシとシカの置物も並んでいます。

子どもたちは火おこし、勾玉づくりなど弥生時代の歴史体験をして楽しんでいました。

この他お土産として、田熊石畑遺跡カンバッチ、木の実の袋詰、赤米の 3 種類が用意され、それぞれ好みの品物を 1 つ持ち帰りました。

開園して 2 年目を迎えた田熊石畑歴史公園です。村づくりの会の活動により、初めて赤米など古代作物が収穫され、秋祭りが行われました。

緑の芝生に覆われた 1 万坪の広い公園は、放課後の子どもたちの居場所づくりや、市民が楽しく散歩をしたり、弥生時代の歴史を知ることのできる場所として、運営されています。お天気の良い日は四塚連山や、許斐山が見え、健康づくりにも最適です。

みんなで「いせきんぐへ行こう」！

編 集 後 記

むなかた電子博物館 紀要委員会
編集長 宮川 幹平

むなかた電子博物館は、この「むなかた」地域での、地域の人々による、地域に関する学びとの密なる連携があってこそ、より光り輝く存在だと考えています。本紀要第 8 号では、宗像のアサギマダラに関する特集記事や、池野地区コミュニティにおける精力的な活動に関する研究論文、北斗の水くみ撮影方法に関するコラムなど、読者の皆様が、よりこの「むなかた」を身近に感じられる構成を目指しました。これからも、ディジタル紀要だからこそ、その表現形式やページ数に制約されることなく、自由に広く「むなかた」に関する活動・研究成果を発表できる場であり続けたいと存じます。是非、お気軽にご相談頂ければ大変嬉しく思います。

紀要第 8 号発行にあたり、多くの皆さまからの御尽力を頂きました。紀要編集の立場からも、ここに改めて御礼を申し上げます。まず、特集記事に関して、取りまとめをご担当頂いた西田氏をはじめとして、前田氏・平松氏・黒川氏のご協力に深く感謝いたします。皆様の納得いく紙面となっていれば幸いです。また、本紀要に貴重な論文をご投稿頂いた船津氏に深く感謝申し上げます。ご投稿頂いた論文をきっかけとして、むなかた電子博物館と地元学との関わりをさらに広げていきたいと考えております。そのほか、むなかた電子博物館紀要編集・発行に関わって頂いたすべての方に厚く御礼申し上げます。

執筆者一覧（掲載順・敬称略）

西田 迪雄（博多昆虫同好会）
前田 秀敏（宗像アサギマダラの会）
平松 秋子（宗像アサギマダラの会）
黒川 康子（宗像植物友の会）
船津 建（池野地区コミュニティ運営協議会 まちづくり計画「池野探索」活動委員会）
堀内 伸太郎（「北斗の水くみ」実行委員会）
平井 正則（「北斗の水くみ」実行委員会）

むなかた電子博物館紀要委員会

委員長　平井 正則
編集長　宮川 幹平
委員　Jose D. Cruz　白木 英敏　西田 迪雄　平松 秋子　堀内 伸太郎
紀要制作協力　西 高志（MIS 九州株式会社）　海の道むなかた館

むなかた電子博物館運営委員会

▶ 役員

委員長　石黒 正紀（福岡教育大学 名誉教授）
副委員長　西田 迪雄（博多昆虫同好会）
事務局長　伊津 信之介（東海大学福岡短期大学 名誉教授）
紀要委員会委員長・「北斗の水くみ」実行委員会 委員長
平井 正則（福岡教育大学 名誉教授）
会計　宮川 幹平（東海大学福岡短期大学）
監査　河田 昭（日本通信工業株式会社 監査役）

▶ 運営委員

岡部 海都（日本野鳥の会 福岡支部会員）
大方 優子（九州産業大学）
鎌田 隆徳（海の道むなかた館）
Jose D. Cruz（北九州市立大学）
黒川 康子（宗像植物友の会）
塘　将典（マージシステム株式会社）
中村 郁夫（CGlabo）
中村 茂徳（精華女子短期大学）
西田 迪雄（博多昆虫同好会）
平松 秋子（むなかた歴史を学ぼう会）
星野 浩司（九州産業大学）
堀内 伸太郎（地質学研究家）

▶ オブザーバー

井上 賢司（海の道むなかた館）
坂本 雄介（海の道むなかた館）
白木 英敏（海の道むなかた館）
西 高志（MIS 九州株式会社）

※敬称略・肩書きは 2017 年 3 月 31 日現在のものである

むなかた電子博物館紀要：投稿募集

むなかた電子博物館では、「むなかた」の自然・文化・歴史に関する論文・研究報告・資料等のご投稿を常時広く募っております。ご投稿頂いた原稿は、むなかた電子博物館紀要委員会による形式審査・編集の後、むなかた電子博物館紀要（電子版・冊子版）に掲載されます。

電子博物館の紀要として、先行して Web 公開される電子版に力を入れておりますため、原稿の形式は電子媒体（ワープロファイル、スライド資料等）に限らせて頂きますが、ハイパーリンクやマルチメディア素材の組み込み等、多様なディジタル表現に出来る限り対応致します。

ご不明の点などがありましたら、むなかた電子博物館紀要委員会（kiyo@mdmn.info）までお問い合わせ下さい。

むなかた電子博物館紀要　第 8 号

ISSN 2185-8659

発行日：2017 年 3 月 31 日

発行者：むなかた電子博物館 紀要委員会

発行所：むなかた電子博物館

むなかた電子博物館 URL http://d-munahaku.com

〒811-3504　福岡県宗像市深田 588 海の道むなかた館内

Tel：0940-62-2600　Fax：0940-62-2601

E-Mail：question@mdmn.info

（むなかた電子博物館全般に関するお問い合わせ）

kiyo@mdmn.info

（むなかた電子博物館紀要に関するお問い合わせ・投稿先）

ISSN 2185-8659

A BULLETIN OF THE MUNAKATA DIGITAL MUSEUM

THE 8TH ISSUE

CONTENTS

Preface (Masanori Hirai) ····· 1

Special Feature: The Chestnut Tiger in Munakata (Editor: Michio Nishida) ····· 2
Observing The Chestnut Tiger in Munakata (Michio Nishida) ····· 5
The Chestnut Tiger, A Mysterious Butterfly (Hidetoshi Maeda) ·····21
Notes on The Chestnut Tiger's Larval Growth (Akiko Hiramatsu) ·····42
Marsdenia Tomentosa, A Host Plant for The Chestnut Tiger (Yasuko Kurokawa) ···50

Article: The Charms and Characteristics of Ikeno Community as Observed in JIMOTOGAKU*
—A Report on The Practice in Community Improvement Program—
(Hajime Funatsu) ·····62

Column: Enjoy Photographing The MIZUKUMI** With A Compact Digital Camera
(Akiko Hiramatsu, Shintaro Horiuchi, Masanori Hirai) ···· 102

Good Days in Munakata :Key Articles from The Munakata Digital Museum 2016 ····· 108

Editor's Note (Kampei Miyakawa) ····· 115

* JIMOTOGAKU is a local study that looks back on its regional history and culture in order to improve community awareness.

** MIZUKUMI refers to the lower culmination of the Big Dipper, when it appears to be scooping water from the sea on the horizon.

March 31 2017

THE EDITORIAL COMMITTEE ON MUNAKATA DIGITAL MUSEUM